

2 DAY : 0
3 DAY : 1
17 DAY : 2
23 DAY : 3
34 DAY : 4
40 DAY : 5
45 DAY : 6
53 DAY : 7
59 DAY : END
64 AFTER : 1
70 AFTER : 2

DAY:0

「近いうちに、守護聖のみんなに、ちよつと迷惑をかけるかもしれません」

とある夜、アンジュの寝室で、彼女はやおらそう呟いた。

読んでいた本から顔をあげると、同じようにベッドに横たわっている恋人に視線を移す。

明日の陽気の話でもするような気安さだが、力の入った雑誌を持つ指先から、平気なふりをしているのだとわかった。

指摘はせず、先ほどの言葉を反芻する。

守護聖に迷惑、ということとは、女王か宇宙に絡むなにかなのだろうか。

「……ずいぶんあやふやだな」

雲をつかむようなとまではいかないが、トラブルであること以外はつきりしない。

シュリの戸惑いを混ぜた言葉に、アンジュは眉を下げてすみません、と謝った。

「でも、私にも具体的にどうなるかわからなくて……予測を話すのもと思うし」

なにも起きないかもしれないんです、と続いて、本当に不確定なのだと知る。

となると、宇宙に関わるということよりは、もう少しプライベートに寄るのだろうか。

だが、それなら守護聖にという言及にそぐわない。はつきりしないのは困るが、いくらかの心の準備ができるだけましだろうか。

しかし日にちも曖昧な状態なので、本当にささやかなものだが。

「——でも、これだけは言えます」

まっすぐに見つめてくる蒼い瞳は、強い意志の力に満ちている。

不安はあれど、それだけではないことがよくわかった。

「私は絶対、シュリをあきらめませんから」

きっぱり告げた言葉は、冗談にしては真剣すぎた。だからからかうことはせずに、読みかけの本を置き、華奢な腰を抱き寄せる。

逆らうこともせず、彼女も雑誌を避けて、おとなしく胸におさまった。

「当たり前だ。俺も諦めたりしない」

揺らぎのかけらもない答えに、アンジュは少しだけ泣きそうな、けれど嬉しそうな笑顔を浮かべた。

「約束ですよ」

小さな小指が、故郷のものだというまじないをかわずべくシュリの小指に絡む。

答える代わりに自分からも指を動かして、誓ったその数日後、それは起きた。

DAY:1

女王の私室で夜を過ごすのは、もはや週の半分以上だ。

昨夜も少しだけ酒を飲んで、寄り添って眠りについた。

今度の休日になにをしてすごそうか、なんて笑いながら話していた。

穏やかな、いまだにくすぐったさは感じつつも、慣れてきた夜のはずだったのだが。

「……これが、その件か？」

いつもどおりの時間に目覚めたシュリは、いつもの癖で隣に眠る人物を確認して、うっかり信じてもない神に聞いた。たたくなくなった。

しかし、女王に仕える守護聖が祈る神など、最早どこにもいやしない。

大体、そんなことをしたって現状に変化が起きることもない。

現実逃避をしたくても、正直言えば時間が惜しい。

命にかかわるとまでは言わないが、近い状況には違いない。

なぜなら、シュリの隣に——アンジュの寝台の上にいるのは、どう見ても生まれたばかりの赤ん坊だからだ。

普通なら誰だと慌てるどころだが、シュリには確

信があった。——この子供は、アンジュ当人だと。

なぜなら、うっすら見える頭髮は桃色で、目も開けばきつと蒼色に違いない。

なにより感じるサクリアは女王のものに相違なく、この赤子は女王でありアンジュで間違いない。

こっそり赤子を運びこむなんて、タチの悪い冗談ができるセキュリティではないし、シュリが気づかないはずがない。

そもそも、今の聖地にこのような容姿の赤子はいない。

つまり、己が感知できない不可侵の力——それこそ宇宙のなにかしらによるものなのだろう。

だが、現状では推測だけで、なにひとつ事実としてわかることはない。

当人に問いたくともゼロ歳児だ、意思の疎通の期待をするだけ無駄だろう。

シュリはそのそりと起きあがると、棚からバスタオルを何枚か持ちだしてきた。

当然ながら縮んでいるので、寝間着の中に赤子の身体が包まれている状態だ。

いくら恋人同士でも、この姿で裸を見られるというのは、……自分だつたらとても複雑だ。

だからシュリは最大限に配慮して、ぐるりとバスタオルでくるみこんだ。

いつのまにか目を覚ましたアンジュは泣きわめく

こともせず、おとなしくされるがままだ。まっすぐ見つめてくる瞳は、赤子らしい無邪気さに欠けている気がする。

「そのまま待っていてくれ」

だからシユリはごく普通に話しかけた。

落ちたりしないように横目で見ながら、手元の端末を操作して、サイラスとユエ、そしてレイナを呼び出す。

同じ説明を幾度もしたくないので、全員まとめてが効率がいい。

サイラスとレイナはすぐに繋がったが、ユエのほうは少しかかるらしい。

保留の画面の間に音声を切って、しみじみと赤子を眺めてみる。

「……ずいぶん丸いものだな」

シユリの知る赤ん坊は、もつとしわくちやだったし、小さかった覚えがある。

だが、女王の力なのか生まれた時がそうだったのかわからないが、大きさもそこそこだし、なかなか可愛らしい。

ダンブではどうしても栄養が偏り気味だから、医療はベースより発展していても、赤ん坊を産みづら環境だったのかもしれない。

首も据わっていないわけだが、幸い接した経験はある。

赤い頬をそつとつついてみるのは、なんとも楽しいものだ。

嫌がらない程度にしているとはいえ、赤子はぐずりもせず、落ちついて横になっている。

こんなことなら、赤子のころの話を聞いておけばよかったが、おそらく気を遣っていたのだろう、話題に出たことはない。

アンジュは話してもよかったのだろうが、こちらに話せることがないので、やめていたと思われる。

今度聞いてみようとな、なるべく楽観的に考えておくことにした。

そうこうしているうちに、眠そうなユエが画面に映ったので音声を入れ直した。

「単刀直入に言う。女王が赤子になった」

『——はあ!』

『ええ?』

『おやおや』

寝起きらしく髪の毛を跳ねさせたユエは、起き抜けとも思えぬ大声を出す。

レイナは流石にきちんとした格好だったが、目を見開いていた。

二人に対して服も髪も整えたサイラスはいつもの調子で、それはびっくり、なんて棒読みだ。

反応は予測済みだったので、論より証拠だとバスタオルでくるんだアンジュを画面に見えるようにし

てやった。

朝起きたらすでにこの姿だったこと、昨夜は特になんの異常もなかったことを淡々と告げるころには、ユエはひとまず落ちつきをとりもどしたようだった。『……じゃあ、必要なものを揃えないとな。レイナ、アンジュの世話を頼めるか?』

『え、ええ……でも私、赤ちゃんの面倒を見たことはなくて……』

立ち直ったユエはすぐさま指示を出したが、レイナは不安げに顔を曇らせる。

たしかに、世話の経験がない者にとっては生まれただの子供の相手は、恐怖を感じるのだらう。

一步間違えば、簡単に命にかかわるのだ。真面目な性格ならなおさらだ。

だがユエはにかつと彼らしく快活に笑ってみせた。『一人で見ろってわけじゃないから大丈夫だって!ただほら、その……着替えとかはマズイだろ?』

ごによごによと照れて濁す姿はこんな時でなければ微笑ましいのだが、からかう隙間はない。

それでもレイナはいくらかほっとした顔で、そうね、とうなずいた。

経験のある女官にも手伝ってもらえばいいが、リーダー格の存在は必要だから、レイナに頼むのが一番だらう。

シユリとユエでとりあえず必要なものをピックアップ

ップすると、サイラスが手早く注文をすませていく。

『準備ができたら、女王の間に全員集合させる』
『ああ、頼む』

守護聖たちの召集はユエに任せればいいだろう。俺はノアを起こしてくる! と叫んで通信が切れたので、少々彼に同情するが。

超特急でどいた荷物を持ったサイラスとレイナがすぐに部屋へやってきたので、レイナに着替えその他を任せてしまう。

シユリにもおむつ交換はできるのだが、……アンジュの名誉のために、辞退して離席することを選んだのだ。

ユエが選んだ服は着脱の簡単なものだったので、詳しくないレイナでもなんとかなったらしい。

ただ、着替えはすんだものの、どうやって抱けばいいのかわからないと悲鳴をあげたので、シユリが抱えて聖殿まで行くことになった。

『……それにしても、おとなしいな』
「本当ですね……こんなに静かなものかしら」

聖殿への道すがら、まったく泣きわめかないので、思わず呟いた。

馬車はほとんど振動を感じさせずに動いているが、喜ぶわけでも、嫌がるわけでもない。

このくらい赤子は、当然言葉を喋れないので、なにかにつけ泣くものだ。

だが、腕の中のアンジュは明瞭な言語は発せられないものの、ぐずすることもなく落ちついている。

レイナの様子からして、バースの赤子が特殊というわけでもないだろう。

こうなった経緯からして異常事態だから、一般的な人間と同じように考えても意味がないのかもしれない。

……つくづく女王も守護聖も、ひとの理からは外れている。

それを今さら悲観するつもりはないが、予測がつけづらいのは勘弁してほしいものだと、気づかれぬよう息をついた。

赤子を見た守護聖の反応は様々だったが、共通しているのは驚きだった。

流石のミランもはじめは茶化すこともしなかった。少し経った今は、興味深げに間近に寄ってきてついついは、フェリクスに窘められているが。

「——ざっとデータを調べましたが、歴代の女王が赤子になった、もしくは若返ったという記録はありません」

サイラスを通じて状況を知らされたタイラーは、集合時間までに過去の事象を急いで調べたらしい。

今もデバイスをタップしながらなので、王立研究

院の情報を収集しているのだろう。

「神鳥の宇宙でも、聞いたことはありませんね。とはいえあちらは二百代以上続いていますから、初期のころはわかりませんが」

「……つまり、かなりの異常事態ってこと、だよね」
ノアの科白に、守護聖たちが静まり返る。

ゼノやカナタは顔をくしゃくしゃに歪めてショックを受けているらしい。

「だが、そう悲観することではないだろう」
見ていられなくて口を挟むと、フェリクスが鋭い目で睨んできた。

女王がこの姿なのか、と言いたいのだろう。
シュリは抱いたままのアンジュをあやししながら、

見てみる、と示す。

「サクリア自体は変化がないだろうか？」

「はい、そして宇宙のほうも、異常値は報告されていません」

タイラーが言葉を添えれば、ミランがそうだねえ、とのんびり呟く。

「僕らのサクリアも普通だし、女王試験前の時みたいな感じもない、アンジュがかーわい赤ちゃんだつてこと以外は、昨日となんにも変わらないね」
その変化が一番大きいわけだが、本当に他はなにも異常がない。

「逆にそれが不思議ですけど……」

ゼノが控えめに呟くが、そのとおりだ。
若くして女王になった者はいる。——というより、
アンジュのように二十代半ばで即位する女王のほう
が珍しいとはサイラスの言だ。

逆に、幼なすぎる年齢での即位もない。

歴代の守護聖の中には十歳未満で就いた者もいる
が、女王となるとそうはいかないのだろう。

そもそも、意思の疎通ができるだけの年齢になっ
ている必要がある。

今のアンジュは見た目こそ乳児だが、女王のサク
リア自体は本来の姿の時と遜色ない。

逆を言えばこの肉体でそれだけのサクリアとい
うのがおかしいとも言えるのだが。

「今のところ宇宙は平穏だ、しばらくの間は守護聖
だけでも、かつてのような崩壊の危機とはならない
だろうね」

ロレンツォの言葉に、女王試験以前を知る者はそ
うだな、とうなずく。

あの時に比べれば宇宙は穏やかだ、勿論あちこち
で問題は発生しているが、おのおので解決すべきも
ので、守護聖が直接赴く緊急性を持つものはほとん
どない。

戦が起きてても、星に住む人類がほぼ壊滅しても
——宇宙全体の維持には関係がない。

「ですが——二十五年も待てるものですか？ タイ

ラー、今の外界の時間はどうなっているんです」

「昨日と同じですね。今のところ、時間が操作され
た形跡はありません」

「……つまり、おねーさんが元の年齢に戻るまでに、
宇宙は……すごい年月が経つって言う……」

ヴァーシルの問いかけにタイラーが答え、カナタ
が続く。

具体的な年数をぼかしたのは、少年なりの優しさ
なのだろう。

「数日ならともかく、二十数年となると、宇宙への
影響も出てくるのでは？ 個人的にはとても愛らし
い姿なので、成長を見られるのは嬉しいですが……」

真面目な顔で守護聖らしく危惧してみせた次の瞬
間には、赤子のアンジュにとろけた笑みを見せる器
用さを発揮するヴァーシルに、フェリクスが白い目
をむける。

「そんなに待ってはられないだろう。警備をつけ
て聖地の外へ出せばいいんじゃないか？」

そもそも聖地には一年の概念すらあやふやだ、そ
の状態で赤子の成長を見守るのは難しいと主張する
のももつともだろう。

フェリクスは至って淡々と、手っ取り早い方法を
述べてくる。

「女王を聖地の外へ出すなんて……」

「前例はないが、状況が悪化するならば、そうも言

っていられないだろう」

渋い顔をするノアに、つけつけと返す。

ロレンツォもフェリクスが発言を後押しするようにならずいた。この男の場合は、どこまで本心でどこまで興味と研究欲かはわからないが。

外界の時間が通常どおりなら、聖地の時間では数日で、アンジュの肉体はもとどおりまで成長することになる。

無理に促進させるわけでもない、時間を間違えなければ、ちよūdの年齢で聖地へもどすことは十分可能だ。

研究院の力と警備の者を総動員して、オウルの上流階級エリア一角を買い占めてしまえば、さほど危険はなく過ごせるだろう。

長く続くなら問題だが、たかが二十年、たいしたことではない。

安全面に関してはシュリにも予想がつけられるから、慣れ親しんでいただろうロレンツォならなおのこと、賛成するのも理解できる。

だが、シュリは反対するべく頭の中で発言をまとめにかかった。

全体の雰囲気は、彼女を聖地の外へ出す方向に傾きつつあるから、急がなくてはならない。

「——そこまではしなくていいと思うぜ？」
具体的なことを話しはじめた二人に、のんびりと

割って入ったのはユエが先だった。

すいと近づいてきた彼は、ヴァージュールの横からシュリの抱く赤ん坊を眺める。

目線で促され赤子を渡すと、慣れた手つきであやしなげに、やつぱりな、と呟いた。

「……気づいたか」

「おう、子守はよくやつてたからな」

シュリの確認に、彼はにかつと頼もしく笑ってみせる。

どうやら己の勘違いではないらしいし、味方になってくれそうだ。

怪訝そうな守護聖たちに見やすいよう、ユエが方向転換をした。

「このアンジュだが、成長が恐ろしく速い」

さつきから抱いていたのでよくわかる、感じる重さが明らかに増えているのだ。

赤子の成長は著しいが、それにしたって異常な速度だ。

「流石に一日二日で元通り……とはならないだろうが、この勢いなら年単位もかからないだろうな」

成長速度がどの程度なのか、そも均等なのかも定かではないが、止める手立てはないのだ、見守るしかあるまい。

「む、むちゃくちゃだ……」

カナタが思わずといった様子で呟くが、全員同意

見なのだろう、窘める声は上がらない。

余裕を持ったサイズの服でよかったと思う。破けてしまつては色々問題だ。

サクリアに問題なし、成長も通常より速い——という事で、全員から少し力が抜ける。

見計らつたかのようにユエがばんと手を叩いた。「ということ、守護聖は通常どおりの執務に励んでくれ。アンジュは流石に女王の執務をさせるわけにはいかないから、アンジュの邸でレイナが見る」

場所に関しては客室をひとつ使おうという話でまとまつた。

寝室のほうが場所としてはいいのだが、プライベートルな部屋に部外者の出入りが増えるのも遠慮してくれだ。

いくつか家具を撤去すれば、一時的な育児部屋にすることは容易だ、なにせ広いのだし。

「で、俺かシユリがついてるから、様子が見たい奴は遠慮せずに遊びにこい。そんな感じだな」

いいよな？ と視線で問いかけられたのでうなずきを返す。

「ええ、どうして二人だけ特別なの？」

半ば答えがわかっているだろうに、笑みを浮かべながらミランが茶々を入れる。

反論する者はおらずとも、納得させるために水をかけてきたのだろう。

「じゃあ、他に赤ん坊の世話したことある奴は？」
「うーん、ご加護を、って抱っこしたことはあるけど、ミルクもあげたことないや」

「そういうことだ」
使用人の中には子供のいる者も多いが、女王の世話となると恐れ多いとばかりかねない。

なにがあるかわからないので、万一を考えて、守護聖と補佐官がついていたほうがいいだろう。

世話の経験のあるユエとシユリが、となるのは当然のなりゆきだ。

ダンブ時代に経験があつてよかつた、とつくづく思う、恋人としては彼女の世話を任せきりにはしたくない。

「あ、あの、お二人だけで大変なら、俺も……」

おずおずと手を挙げたのはゼノだ、たしかに彼も経験があるだろう。

だがユエは、いや、と首をふる。
「ゼノには他にやって欲しいことがある」

「え？」

きよとんとする彼に、ユエはアンジュの使う道具を用意してほしいと依頼した。

彼女が生きていた時代はすでに過去のものとなり、当時使用していただろうおもちゃは過去の遺物だ。

記憶などがどうなるのかは定かではないが、できるだけ同じものを用意してやりたい、とユエは言う。

ただ、どれも古いものになるので、手に入れられても動くかはわからない。

「製法は調べれば出てきますよね？　なら、作りますよ」

話を聞いたゼノは二つ返事で引き受ける。

アンジュとの会話で聞いたことのある玩具などの情報を守護聖から聞きだすと、ゼノは早速！　と執務室へ戻っていった。

他の者もとりあえず仕事をしてくる、と続いた。

「俺も急ぎだけ片づけてくる。その間頼むな」

ユエも急ぎ足で出ていき、レイナには大きくなりそうなので今のうちに服を頼んだ。

折角なので可愛いのにしましょうか、と言う程度には明るさをとりもどしたようで、ほっとする。

一応、試しにミルクを与えてみたところごくごくと飲んでくれたし、レイナに頼んでおむつも交換してもらったが、やはり恐ろしいほど手がかからない。

とはいえ、成長が速いのであれば、栄養が足りなくなる懸念がある。

サイラスも考えたのだろう、オウルでは有名な――ただし非常に高額な栄養食を持ってきた。

歯が生えてきたらこれを少しづつ与えてみればい

いだろう。
大慌てで運びこまれたベッドは、大きめのシングルベッドになった。

子供用では成長速度が驚異だった場合、危険だという意見が出たからだ。

だが大きすぎてはそれもそれでということ、この大きさに落ちついた。

中心に寝かせて、念のため周囲に転倒防止の柵を配置する。

なにをしないでかすかわからないのが子供というものだ、通常と違うといっても、対策はしておくべきだろう。

気を抜いた隙にベッドから落ちるだとか、事故の可能性はどこにも潜んでいるのだから。

天井からはゆらゆらと揺れるモビールもとりつけて、急ごしらえにしては上出来だ。

ご機嫌で揺らぐさまを眺める様子を横目に、シュリは転送できるものは手元の端末に移してもらい仕事を

二時間ほどでもどつてきたユエと交代して、執務室でしかできないことをすませていった。

常ならば執務室以外の場所に仕事を持ちこみたくないのだが、今は非常事態だ。

仕事用の端末を用意してもらい、当面はこれを持ちこむことにする。

様子が心配というのもあるが、成長していく恋人の姿を見たいという気持ちが大きかった。

思い出に繋がるものはなにひとつ持ちこんでこ

かったから、幼いころの姿はお互い知ることではない。それが不満だとかではないが、機会があるなら逃す手はないだろう。

昼すぎにアンジュの部屋へもどると、そこには最新の映像機械を四方に設置するユエの姿があった。考えることは皆同じということだろう。

防犯面でも必要だしな！ と天晴れな棒読みで告げられた。

べつに止めるつもりはないので、指摘はしないでやる。

肝心のアンジュはというと、すやすやと眠っていた。赤子なので当然というところか。

「……流石にあまり大きくなっていないな」

出ていく前とあまり変化はないようだ。

ユエもそうだな、とうなずいている。

「まー、生まれたばかりは普通にしててもすげえ育つしな」

「たしかに。あまりに速くなると、危険か」

通常の生育でも、数ヶ月で二倍以上になるのだからちよつとした脅威だ。

宇宙意思によるものだとすれば、折角の女王を失う暴挙をするわけがない。

それでも、朝より人間の動きに反応するようになってきているから、成長していることは間違いない。

そこへサイラスが顔を出した。――両手に、持ち

きれないほどのおもちやを持って。

「ゼノ様から届きました、とりあえず、だそうで」

「……とりあえずの量に見えないけれど」

レイナが若干引いているのも当然だろう。

サイラスが抱えてやっという数だ、初孫に喜んだ祖父みたいね、という呟きを耳にして、なるほどそういうものなのか、と思う。

思い起こせば己もダンブで子供が生まれた時、少し張りこんで真新しいおもちやを買った覚えがある。

あんな場所でも、新しい命は尊いものだった。

生まれてきたかれらが安全に、少しでも幸せになつてほしいと、治安の改善を決意したものだ。

「ゼノの奴、のめり込んでるな……ちよつと注意してくる」

ユエは苦笑いしながら、すぐ出て行ってしまった。

成長が普通と異なるのだ、おもちやをたくさん用意しても、すぐ不要になつてしまう。

……もしもの未来に使えたら、なんて、ずいぶん甘い想像だ。

「よく調べてくださったんですね……懐かしいものがたくさん」

レイナは顔をほころばせて、アンジュに与えるおもちやを選びにかかった。

シユリにはよくわからないので任せることにして、アンジュを観察しているサイラスに視線をむけた。

そのまま顎を引いてみせれば、察したらしく共に廊下へ出てきた。

「——まだ推測の段階ですが」

促す前に話しはじめたので、手間が省けていい。

「歴代の女王のプロフィールを確認すると、アンジユ様と明らかに異なる点がひとつありました。それは、先ほども申しあげた年齢です」

タブレットを操作すると空間に映像が射出され、ずらりと並ぶのはおおよそ十代半ばの年齢ばかり。

神鳥の女王就任時の年齢なのだとすぐにわかった。

次に出てきたのはもっとと総数が少ないもの——こちらの宇宙の女王たち。

だがそれも、年齢という点で見れば似たようなものだ。

ざっと見たかぎりでも、二十代すぎでの女王就任は存在しない。

「女王という存在は宇宙意思との交信が必須です。それを踏まえると、ある程度若いほうが順応しやすい可能性は高いでしょう」

勿論、年齢を重ねることが悪いわけではない。

だが、女王という存在は特殊なものだ。

よくも悪くも自我がきつちりと確立されて、大人になっていく状態というのは、宇宙からの力を受けとりにくくする危惧は予想できる。

社会のあれこれだとか、手厳しい現実だとかを知

った状況では、おとぎ話めいたものを素直に信じられなくなるものだ。

女王という存在を知っていて、聖地と同じ星であるオウルにいたシュリすらそうだったのだから。

守護聖に求められる条件においては、年齢が上でも問題は無い。

実際、サクリアが身に持続する年月と、就任時の年齢はバラバラで、因果関係はないとサイラスが追記した。

しかし相手が女王となると、状況は変わってくるわけだ。

「だから——やり直しということか？」

「それなら宇宙は女王を選び直すでしょう。アンジユ様の心や能力には問題がないのではないかと」

「……となると、身体の問題か」

アンジユであることに異論はないが、肉体になんらかのトラブルがあり、それを解消するためのこの状況ということか。

ならばサクリアに変化がない事実の裏づけにもなるだろう。

とはいえまだ赤子なので、育っていく彼女が以前のままの彼女になるのかどうかは、なんとも判断がつかない。

宇宙意思にとって必要なのはサクリアだけかもしれないが、それなら試験を行った意義がない。

アンジュがアンジュであるからこそその理由がある
と信じたいところだが、あいにく、守護聖には宇宙
意思の声は聞こえない。

「すでにベースでの健康診断の結果は入手していま
す、今後の成長は、そちらと突き合わせていきます」

「……お前に任せるのは癪だが、それしかないか」
覚えず忌々しげに呟いてしまう。

女王となった今でこそ、公私共々サポートしてく
れる頼もしい存在だが、それはアンジュが女王にな
ったからだ。

そうでない存在には、必要のない処置は一切行わ
ない男だと、シユリは嫌というほど知っている。

決して冷徹なわけではないのだが、私情を挟まな
い行動をとるために、どうにも任せきりにしづらい。

シユリの葛藤に気づいているだろうに、サイラス
は常と変わらない笑顔を浮かべたままだ。

「私は一度も、あなたの敵になった覚えはありませんよ」

掛け値無しの事実なのだが、過去をふり返ると、
空々しく思えてしまう。

しでかしたことは敵と見なされてもしかたないこ
となのに、この泰然さ。

盛大に舌打ちをして、ぎろりと睨んでもどこ吹く
風だ。

「全てを諦めることなく手にしたアンジュ様のこと

は、尊重しているんですよ」

すべて、の部分の少しばかり強調してみせる。

「ですから、完全なアンジュ様に再会したいと、心
から思っています」

じつと見つめても、視線を逸らすことはない。

——今回は、信用してもいいかもしれない。

サイラスにとって重要なのは、女王が正しく存在
すること。

いまだにアンジュを女王と認識しているなら、復
帰のための助力は惜しまないはずだ。

であるならば、これほど強力な味方もいない。

少々——いや、かなり嫌な面もあるのだが、目的
のために個人的な気分を挟んで失敗するなんて御免
被る。

「わかった。——頼む」

洩々言葉にすると、サイラスは仰々しく一札して
みせた。

憎らしいまでに美しい所作に、一発くらい殴って
もいいんじゃないかと魔がさしかける。

「……二人とも、なにをしているんだ？」

タイミングよくというか悪くというか、やってき
たフェリクスが訝しげに二人を見つめた。

小脇には画帳などを抱えている。

サイラスはにこりと笑みを浮かべて誤魔化すと、
レイナに入っても大丈夫か問いかける。

了承を得てから入ると、ちょうどおむつを替えたところだったらしい。

廊下にいたいわけがついたし、フェリクスの興味はすでに移っていたようだ。

彼は適当な椅子を運んでくると、ベッドの中の赤子を眺めながら、持ってきた画帳を開いて早速スケッチをはじめた。

「……データで記録しているのは知ってるけど、こういうのもいいと思うから」

「それは同感だ。お前の絵は巧いものだし」

後ろから気にならない程度の距離をとって覗いてみると、見る間に愛らしい姿が下書きされていく。

世辞でもなんでもなく、正直な言葉を口にしただけなのだが、シュリの言葉に、夢の守護聖は一瞬言葉をなくし、それからぶつきらぼうにそうか、と返した。

「ふふ、照れ隠し」

なんとも間の悪いことに、ちょうどミランが目撃してしまい、言わなくていいことを指摘してしまう。

「ミラン……」

フェリクスは思わず叫びそうになったが、赤子を困らせてはいけないと理性を効かせたのだろう、低い声で唸るだけだった。

なんだかんだで気遣いのできる男だと感心しつつ、守護聖が続々集まるだろうからと、用意されたソフ

アのひとつに腰を落とす。

小さな声でやいのやいのミランと口論する、という器用な真似をしながらも、フェリクスの腕は止まらない。

ミランもからかいはするものの、彼の作業を邪魔するほどではない。

それどころか近くにあったおもちゃを器用に扱って、アンジュをあやしてさえみせる。

以前から二人は腐れ縁のような仲だったが、己はそこに入ることはなかった。

なんの役にも立たないなれ合いだど、どこか冷めて見ていた面すらあった。

だが今は、かつての相棒を想起し懐かくなると同時に、穏やかな気持ちで眺めていられる。

すべては、恋人がきっかけを——止まっていた時間を動かしてくれたからだ。

改めて彼女に感謝しなくてはと思いつながら、賑やかな面々を眺めていた。

その後も入れ替わりに守護聖たちがやってきて、なんだかんだとアンジュを構っていったり、ただ眺めたりしていった。

一日ではあまり大きな変化はなかったもので、一歳になるかならずというところだろう。

それでも、視線にははつきりしたものを感ずるようになつたし、不明瞭な言葉もどきも発しようとしている。

成長速度がすさまじいことに変わりはない。

夜に入つてすぐではあるが、ぐっすり眠る赤子はちよつとやそつとでは起きる気配がない。

夜泣きだなんだの心配は少なそうだ。

流石のシュリも、夜中の授乳はきついで、ありがたくはある。

「……寝ている間つて、成長するのかな」

今のアンジュでは、自分が近づくと危ないかもしれないから、と遠くから見つめて、ノアが首をかしげた。

遠慮していたのだろう、日中はほとんど顔を見せなかった。

けれど心配しているのは同じらしく、ちゃんと眠つてる？ と訪ねてきた。

通常の間であれば、眠っている間も成長しているものだが、なにせ普通ではない。

「一晩で赤ん坊まで縮んだわけだから、逆もなくはない……か？」

ユエも真面目くさつた顔をしているが、どれも予想でしかない。

もしかしたら明日には二十歳になっている可能性だつてあるわけだ。

しかし、まさか全裸で眠らせるのも問題がある。

「このまま普通のベッドに寝かせて、服は……万一破れても首が絞まらないものにすればいいだろう」

シュリの発言にその場の全員が納得し、念のため柵の高さを調節する。

大きく育つて目覚めた時に混乱し、落ちたりしないようにだ。

着替えはレイナに任せて、協力すればあつというまだ。

絢爛豪華な客室に小さなアンジュ、くるんであるタオルケットは謎の生命体の描かれたファンシーなものという、なかなかシユールな光景になる。

「あとは俺が、そこで寝ればいい」

寝室に置いてあるソファを示せば、ユエがちよつと眉をひそめた。

「それじゃ眠れねーだろ」

「何度かソファで寝たが、そうでもないぞ」

けろりと言いつつ、寝落ちはよくねーぞ、と叱られた。

クッションもついていて、空調の効いた室内だ、十分すぎるほどだろう。

客室といえど女王の邸だ、ソファは十二分に快適で、横になつて足が余ることもない。

「心配だから同じ部屋にいたい、赤子と同じベッドは流石に俺も不安だからな」

潰すことはしないだろうけれど、流石に経験がないので躊躇ってしまう。

とはいえ、今からベッドをもう一台、なんて労力をかけるのは面倒だし気が引ける。

ソファで就寝が手っ取り早い方法だろう。

何日も続くことではないのだから、身体の負担もさしてない。

ユエは渋い顔をしたが、長身のシュリが横になっても問題ない大きさだからと、最終的には折れてくれた。

サイラスやノアは本人がいいなら、とあっさりしたものだ。

アンジュの安全が確保できれば、と言い放つあたり優先順位がはっきりしているが、それでもシュリの恋人のそばにいたい気持ち尊重してくれる。

万一の際は連絡すると決めて、残りの者は部屋を出て行った。

アンジュの部屋に置いてある着替えをひっぱりだして私服になると、シュリは少しだけ悩んで寝酒もやめておく。

酒の匂いは子供にはよくないと考えたからだ。

ひよいと覗くと、アンジュは相変わらずすやすやと眠っている。

山ほど写真を撮ったし、スケッチもいいものが何枚もあったし、そもそも赤ん坊は無条件にとんでも

なくかわいいものだが、

「——やっぱり、いつのもお前に会いたいな」

どうしても、苦笑いして呟いてしまう。

明日の朝の成長を信じて、ひとまずソファに横になった。

精神的に疲労していたせいなのか、眠りはすぐに訪れた。

DAY:2

翌朝、目を開けるとすぐさまベッドへ近づいた。そこには、ほとんど昨夜と同じ姿で眠る赤ん坊がひとり。

やはり、就寝中の成長は少なめのようなだ。

残念なような、急な変化は負担もあるだろうから安心のような、我ながら説明しづらい心境だ。

夜中に起こされることもなかったし、世の親が聞いたら羨ましがることだろう。

さて、一日で何歳になるのだろうか。

今日も守護聖はできる仕事を分担することで決まり、レイナは女王がしなくてはならない急務だけを肩代わりする。

女王補佐官である彼女にしか、女王の代わりはつとまらない。

書類仕事なら代われても、肝心な部分は彼女に頼るしかないのだ。

しかし、レイナはあくまで補佐官であり、宇宙に選ばれたのはアンジュだけだ。

候補時代と違い、今の両者には明確にサクリアの違いがある。長期化すれば、レイナの負担が大きくなることははっきりしている。

そもそも、彼女ではできない部分もあるので、放置していれば再び宇宙が不安定になってしまう。

やはり、あまりのんびり成長を待つわけにはいかない。

宇宙が穏やかな今だからその変化なのだろうが、なにが起きるかわからないもまた事実。

料理人が腕によりをかけた離乳食を与えて、まだ眠くなさそうなので腕に抱いてあやしてやる。

青い目がじいっと自分を見つめてくるのだが、赤子らしさからはほど遠い意思があるような気がした。小さな手ながらもそ動くが、なにができるわけでもないと思つたらしく、むう、と唸ってしまう。

しばらく単語にもならない音を発していたのだが、不意に、

「しゅい」

——大分明瞭な言葉が出た。

シュリを見つめての発語なので、おそらく名前を呼んだつもりなのだろう。

たどたどしいながらも久しぶりに呼ばれたことで、ふ、と口元がほころぶのを自覚した。

本人は出てきた言葉が不服だったのか、ぷうっとほつべたを膨らませたので、思わず指でつついてしまった。

「どうした？」

見つめ返して問いかけると、それ以上は言葉が難しいのか、唇は動くが音は続かない。

けれど、こちらを認識していることは間違いない

ようだ。

「もうすぐレイナも戻ってくるし、他の者もくるだろう」

なんだかんだで興味半分、心配半分、可愛さが大量といたところ、理由をつけて全員やってくるはずだ。

今日も大騒ぎになることは想像に難くない。

「そうしたら、みんなの名前を呼んでやるといい、きつと喜ぶし、安心する」

赤ん坊の状況で、自分の恋人なのだからなどと主張するつもりはない。

近くにいたいとは思うけれど、それはそれ、これはこれだ。

だから穏やかに声をかけると、わかった、と言わんばかりにこくんとうなずいた。

だが次の瞬間には、うゆ、ともたついた声をあげてしまう。

まだまだ発語が難しいらしい。

ぶんぶん手をふって不満をあらわす赤子をからかうことはしない。

「練習ならつきあおう、気にせず声を出してみろ」
拙いのは幼児なら当たり前だが、なにかしらの自覚があると、思い通りにならない現状にとまどいや羞恥があるだろう。

そのため発語ができないなら、迷いを払ってやる

までだ。

頭をなでながら促すと、しばらくしてから、
「あー、い、う、えー……」

ひとつずつ単語を呟きはじめた。本気で練習のもりらしい。

シュリの知らない言葉の順番で、たどたどしい歌にもならないものが流れていく。

これはこれで楽しくて、シュリは薄く笑みを浮かべてそばについていた。

「れーな」

特訓の成果が出て、仕事を片づけてやってきたレイナに、アンジュは小さな手を伸ばして名を呼んでみせた。

効果は抜群で、レイナはアンジュ……！ と感極まったように叫んで抱きしめた。

つぶれやしないかと心配になったが、流石に手加減したらしい。

よちよちと手を上げたアンジュは、へにやりと眉を下げて、レイナの腕をなでた。

「れーな、ごめ」

「ごめ……？ ごめん、つてことかしら」
カタコトの幼児語を解説すると、こくん、とうな

ずく。

突然の変化によって迷惑をかけた、と謝りたいの
だろう。

だがレイナは綺麗に笑って、いいのよ、と返す。
「最初はびっくりしたけれど……あなただだって完全
に予想できたわけじゃないからよかったみたいだし」

わかっていけばシュリにだけ曖昧にこぼすことは
なかったはずだ。

守護聖に周知させて、不在の間に滞らないよう、
采配してからだつたろう。

補佐官という、守護聖とはまた違う関係で結ばれ
ている彼女に隠しごとをする気はなかったはずだ。

「小さい子のお世話してたことがないから、新鮮
だし、気にしないで」

女王と補佐官、守護聖も——が、己の子供を持ち
えるのは、任期を終えて只人にもどつてからだ。

だが、力を使いすぎていたりすれば、穏やかな余
生を送れなくなってしまう。……先代女王のように。

今のところ現女王は力に満ちているが、それでも
このアクシデントだ。

レイナの言葉に、泣きそうな顔だったアンジュも
少し顔色をよくする。

「守護聖の皆様も、きつとそうなもの。せいぜいか
わいくふるまって喜ばせればいいわ」

にこにこ笑いながら、シュリよりあざといことを
言い放つ。

流石というべきか、なんというか。転んでもただ
では起きない精神は立派なものだ。

「ねえ、全員、籠絡させましようよ！ だってこん
なに可愛いんだから！」

それどころか妙な方向に走っている気がする。
赤ん坊の愛らしさに陥落させるだけならいいのだ
が、それ以上となるとシュリとしては看過できない。

とはいえ指摘するのもおとなげない。

せいぜい守護聖たちに睨みを利かせるしかないか、
と隠れてため息をひとつ吐いた。

二人の予測どおり、午後には仕事を終わらせた
らしい守護聖が集まってきた。

フェリクスは相変わらさずスケッチに精を出して、
ゼノはおもちやを使ったところが見たいと遊び相手
を買って出た。

カナタとミラン、ノアは顔を見せにきたが、おの
おの理由は別だが長居はしなかった。

それでも名前を呼ばれば嬉しそうにしていて、
特にノアは虚を突かれた顔のあと、耳を赤く染めて
いた。

彼の過去を思うと、いくらかの切なさとともに、
ほほえましさを感じたりした。

ミランが長居しないことにはいくらか驚いたけれ
ど、

ミランが長居しないことにはいくらか驚いたけれ
ど、

ど、フェリクスの分もこっそり仕事をしていると知って、なるほどと納得した。

カナタは、……もどるとわかっけていても不安で、見ていると気持ち揺らぐのだろう。

子供は感情の浮き沈みに敏感でもある、無理強いをするものではないので、もう少し大きくなるまでそのままでもいいだろう。

ユエは慣れた様子で遊んでやり、ヴァージルはたまに相手に加わりつつ、緩みきった笑顔で一挙手一投足をガン見している。……ちよつと、殴るべきか悩ましい。

そんな中、部屋にはいるがほとんど動かない者が一人いた。——ロレンツオだ。

知恵を司る彼だが、守護聖になる前から赤子に接した経験がほとんどないと白状し、いつも遠巻きに眺めるばかりになっている。

上流階級の者は、子供の世話は乳母に任せることが多いというから、彼も似たような育ちかただったのだろう。

子供らしい遊びもほとんどし経験していないのだろう、原始的なおもちゃをしげしげ見つけていた。

とはいえ興味はあるらしく、早々に訪ねてきたし、時折アンジュがはしゃいだ声をあげると、足が前に進みかけて、けれど結局止まってしまふ。

その姿はいつもの彼からすると驚くほど消極的で、

つまり、日ごろからかわれている身としては、たいそう溜飲が下がる。

シュリはふと名案を思いつくと、内心でほくそ笑みながら、ラグの上でおもちやを使っていたアンジュを抱きかかえる。

ロレンツオのほうへと足をむければ、アンジュも察したらしい。

「ほら、ロレンツオ」

本来なら人見知りなどが出てきて、家族と他者の区別をつける年齢だが、普通の幼児ではないからだろう。

アンジュは泣くこともせず、シュリの腕におさまりながら、大きな瞳でロレンツオを凝視する。

居心地が悪そうにしつつも、視線をそらせず困惑する彼に——

「——っお」

にこお、と全開の笑顔で、舌つ足らずに名前のようなものを口にした。

……どうやら「ロレンツオ」は長すぎて難しかったらしい。

背後では耐えきれなかったらしいユエら数名が吹きだしている。

シュリも内心では爆笑だったが、笑うことでアンジュが気を悪くしないようにと我慢した。

さて変な名前と呼ばれた本人はどう反応するかと

伺っていると、

「……アンジュ、もう一回、呼んでくれないかな？」
いつも携帯しているデバイスの、研究用以外で使
用したことがないだろう録画モードを起動させ、懇
願してきたので、今度こそシュリも爆笑した。

そんなこんなを経て、単語を喋れる程度になった
アンジュだったが、その分疲労したのだろう、眠た
そうに頭をゆらゆらしはじめたので、早々に寝かせ
ることになった。

サイラスが隙あらば簡易的なスキャンをかけてい
るが、今のところ成長自体に問題は見受けられない
という。

レイナにお休みなさいと声をかけられて、くつつ
きそうな目で手をふる姿は大層愛らしかった。

眠る赤子の傍らにデカイ男二人、という構図は、
客観的にはなかなかシユールだろう。

「この調子ですと、明日にはちゃんとした会話が可
能になりそうですね」

サイラスの言葉に、そうだな、とふつくらした頬
を見つめてうなずく。

眠るアンジュは二〜三歳程度だろうか。

さっきまでの彼女も、言葉こそ覚束ないものの、
コミュニケーションはとれていた。

こちらの言うことは完全に理解しているようで、
簡単な絵合わせなどは百発百中している。

知能レベルと肉体系年齢に隔たりがあるのは間違い
ない。

おかげで、食事やらなにやらがスムーズにすんだ
ので、ありがたかったのだが。

シュリの記憶にある子供……というより、ガキど
もと表現すべきだろうか、かれらとあまりに異なる
ので、逆に違和感があるほどだ。

どうしたって手足が小さいので、ものをこぼした
りはするが、それでも行儀よく食事や諸々がすんだ。

まっとうな子供ではないといっても、もう少し手
間がかかってもいいのでは、とすら感じてしまうの
だ。本人に楽しめと言うのは無責任だろうが。

「レイナ様への態度からして、女王としての自覚は
あるようですが……それ以外の記憶はまだはつきり
しませんね」

二人が気にしているのは、個としてのアンジュの
ほうだ。

肉体の表面的な部分と、内面……思い出などの部
分と。

この調子で成長すれば、明日には本人に問えるだ
ろうが、流石のシュリも少々不安になる。

「……覚えているのだろうか」

女王になる前、ただのひとであったころのことを、

そして、シユリとの関係を――

よりにもよってサイラス相手に愚痴をこぼしたくないのだが、他にこんなことを吐ける相手もいない。「さあ、確率を申し上げたくとも、状況的に高くはなく、さりとて低く言うのは宇宙に失礼ですから」予想どおり、気休めなど一切ない返答が逆にありがたかった。

情感のかけらもない、けれど宇宙――女王への敬意はしっかりと感じられるあたりがいかに彼らしい。研究職にとって「わからない」というのは、あまり好まないはずなのに。

そもそも、この状況できっと大丈夫なんて言われても信じられるはずはない。

我ながらの失言に眉をしかめたが、サイラスはなにを指摘することもなく、ではまた明日、と一礼して去って行った。

まるで、先の発言など聞いていなかったように。彼なりの気遣いなのか、どうでもいいのか――後者の気がするが、なんとも判別がつきにくいので、感謝の言葉は宙に浮いたままだ。

どうせ、問いつめたってしらばっくれるに決まっている。

ふう、と息をついて、眠る子供を眺める。

不安はあるし、忘れられていたら落ちこみもするだろう。

――だが、彼女と約束した。

「……諦めるつもりはない」

アンジュだつてあきらめないと断言したのだ。なら、ここでシユリがくじけるわけにはいかない。死んだわけでも、女王でなくなるわけでもない。それならいくらでもやり直せる。

もしも忘れていたって、何度でも口説けばいいだけだ。

言い聞かせるように胸の中で呟いて、今日もソファで寝ることにする。

心配があるなら、なおさら己の体調だけでも万全にしておくべきだ。

睡眠不足の頭では、どうせろくな解決法も浮かびやしない。

微かに聞こえてくる寝息を耳に入れながら、強引に目を閉じた。

DAY:3

ふと、近くの気配が動いたと察してすぐ、上半身を起こした。

急いでベッドを見れば、いくらか成長したアンジュが丸まっているのが見えた。

念のため昨夜も大きめのパジャマを着せていたが、そこまでキツそうではない。

ベッドの上なので、転げ落ちたわけでもなさそうだが、さてどうしたのだろう。

「おはよう。どうした、服が苦しいか？」

それでも心配で意図的に足音を立ててから声をかけると、びやっと肩が跳ねた。

頭だけが上がり、大きな目がじっとシュリを見つめてくる。

もたもたと身体を起こそうとするが、どうにもバランスが悪い。

おそらく、成長速度と実感がズレて、重心がうまくとれないのだろう。

迂闊に動いてベッドから落ち、怪我でもしたら一大事だ。

「少し落ちつけ、転ぶぞ」

指摘すれば理解したのか、ひとまず動きが止まる。一言添えてから、ベッドの背もたれに寄りかかるようにしてすわらせてやった。

しばらくおとなしくしていれば、頭の重さなどのバランスもとれてくるだろう。

「改めて、おはよう、アンジュ。気持ち悪かったりはしないか？」

「おはよ、シュリ。うん、だいじよぶ」
顔色を見たところ、健康的な幼児そのものだが、念のため問うてみる。

まだ言葉はところどころはつきりしないが、昨夜よりしつかりしてきているようだ。

すぐに身体も慣れたらしく、慎重に広いベッドを歩きだしたので、急いで降りる場所に踏み台を設置してやった。

これは、なにごとくも気の利くゼノが寝台の高さを気にしてつくっておいたものだ。

急ごしらえのくせに、ボタンひとつで手すりまで出現するのだから、舌を巻くほかない。

万一の時はすぐ救助できるようすぐ近くに控えていたが、アンジュは手すりを利用して、無事床に着地した。

二本の足で床を踏みしめたことで、謎の感動があったらしく、ふお、と声をあげて満足げだ。

立っついてはあまりにも身長差があるので、シュリは最大限にかがんで視線を合わせてやる。

「レイナを呼ぶから、少し待っている」

これだけ自我ができていながら、男性に着替えを

されるのは嫌だろう。

他にもなにかと、女性同士のほうがいいはずだ。

普通の子供と違うので、言葉にしておけばうるついで怪我をすることもない。

すなおにうなづく姿に安心しつつ、それでも目は離せずに、シユリはまずレイナに連絡をとった。

そのままユエへと相手を切りかえると、アンジュが画面に映りたがる動作をした。

角度を調節してやると、律儀なユエは画面のむこうで屈んでみせる。

「おー、また成長したな！ おはよう！」

屈託なく微笑む顔に、アンジュの顔から緊張が薄まる。

けれど次の瞬間には再び真面目な表情になった。横で見ていたシユリにもわかるほど一瞬での変化

に、周囲の空気すら変わって感じる。「したくがおわつたら、みんなをあつめたいの」

言葉こそたどたどしいが、そこには有無を言わせぬ庄があった。

本来の彼女の――女王としての命令を聞く時と同じもの。

声だけではない、気配もだ。守護聖としての本能だろう、シユリもユエも、同時に背を伸ばし頭を垂れる。

感じられる女王としての威厳は、なりは小さくと

もかつてと遜色なく、それどころか増している気すらした。

この状況に対して、守護聖としては喜ぶべきことなのだろう。

子供にもどっても問題はないのだと、データではなく本能めいた部分で察知できたのだから。

だがただのシユリとしては、胸に嫌な予感が渦巻くのを止められずにいた。

レイナと入れかわりに部屋を出て、自分の邸にもどり着替えなどをすませると、シユリはすぐにアンジュの私邸へもどった。

ここでお待ちくださいと言われたのは、今まで使ったことのないサンルームだった。

日の光がよく入るいい場所だが、二人ともこういう場所に馴染みがなく、すぐ部屋へ行ってしまっていた。

アンジュが家主になってはじめて、正しい用途で使われるのがこのタイミングとは、なんともコメン

トしづらいものだ。

三々五々、他の守護聖も集まってきて、めいめいにソファや椅子に腰かける。

急遽持ちこまれたらしい椅子に腰かけると、レイナに抱きかかえられてアンジュがやってきた。

かわいらしいピンク色のワンピース姿は微笑ましいが、表情はおよそ幼児らしくない。

途端、なにを言うまでもなく全員が立ちあがった。九人に見つめられれば、恐怖を感じそうなものだが、彼女は確認するように全員を見つめていく。

目線が合わないからだろう、レイナに抱えられたままだったが、愛らしさとは無縁だった。

視線が一周したところで、アンジュはまず頭を下げた。

「いきなり、めいわくかけて、ごめなさい」

「…驚いたけど、そんなに迷惑とは思ってない」
硬直をといてすぐに否定したのは、ノアだった。

ユエはまだ固まっついて、彼の言葉に我に返ったらしい。

闇の守護聖は、万一を考えてアンジュから距離をとっているが、表情は穏やかだ。

「見てのとおり、誰もやつれたりしてないし」

「——お、おう！ ノアの言うとおりだぜ！」

「…でも、やっとしやべれるようになったから、まず、って」

頑固なところのある女王はきっぱり言う、義理堅いことだ。

「それで、こんかいのわたしの、じよ…じようきょう、だけど…」

説明しようとするものの、なかなか難しい言葉が

出てこないらしい。

まだ幼児だから当たり前なのだが、どうやら中味は女王のアンジュで間違いないらしい。

たどたどしくなる言葉に自分でもとまどっているようだった。

するりと横についたサイラスが、ひそひそと横から適切な言葉をフォローしていき、なんとか話は続いていく。

少しずつ喋ってくれた内容をまとめると、やはり今回の赤ん坊返りは、アンジュの年齢に起因しての事態だという。

そのままでも問題はないが、より効率よく、負担なく女王の力を行使するには、一度身体をリセットしたほうがいい。

アンジュの身体に問題があったというよりは、長年、人間世界にいたために、順応しづらくなっていたことが大きかった。

王立研究院で調べてもなにも出ない、あくまで女王と宇宙意思との間の問題だったため、他には知らせず準備を進めていたのだが、加減を間違えて突然赤子にもどってしまった。

聖地の中で成長をやり直すことになってはいたのだが、まさか赤ん坊までもどるとは思っておらず、本人もあせつたらしい。

「でも、成長は速いし、サクリアも問題ないし、お

喋りできるようになったから、気にしなくていいんじゃない？」

「にっこり笑うミランに、つられて笑む姿は名前どおりに天使のようだ。」

他の守護聖たちも、そうだな、とうなずきあう。

「えつと、それで……記憶って、どうなってるの？」
お姉さんと呼ぶわけにもいかず、さりとて陛下もなんだか……と悩み続けているらしいカナタが、躊躇いがちに問いかける。

たしかに、と全員が再びアンジュを見つめた。

誰もが聞きたくて、けれど聞きづらかったことだ。

カナタは相当の覚悟を持って口にしたのだろう。小さいアンジュを避けた罪悪感かもしれない。

今までの会話からして、女王としての記憶は保持しているのは間違いない。不可思議な話ではあるが、なにせ女王と宇宙が相手だ、説明できない事象もしたかないのだろう。

「たぶん……ねんれいとおなじ、きおくがもどる、みたい？」

今のアンジュにあるひととしての思い出は、三歳前後のものだという。

「といったも、そのころの記憶など誰でも曖昧だから、おそらく、としか言えない。」

「ただ、女王になってからは、おぼえてる。みんなも、わかる」

正確に言うなら宇宙意思と交信してからの記憶で、要するに宇宙意思がバックアップ代わりになったわけだ。

宇宙の記憶は膨大だから、それはそれで頭がパンクしそうだが、女王としての記憶は別枠らしい。

ロレンツォが興味津々に目を輝かせているので、あとで王立研究院に籠もるのだろう。

アンジュに根掘り葉掘り聞くようならば、殴って止めようと決意しておく。

「個の記憶が年齢と共にというのは、脳への負担軽減でしょうね」

細かいことは調べてからですが、と言うサイラスだが、彼の予測は納得できる。

成長途中の脳に、二十五年分の記憶と女王としてのすべてを一度に放りこんだら、相当な負荷がかかることは間違いない。

だが、サクリアは間違はなく身に存在するので、そちらの記憶は早急にもどす必要があり、従っての結果なのだろう。

女王としての記憶は宇宙と共有しており、言うなれば記憶媒体から都度読みこんでるみたいなものですね、と説明された。

だから、覚えていても脳への負担はさほどではない、らしい。

……いちいち読みとっているのもつらい気がする

のだが、宇宙意思は守護聖には未知の領域だ、大丈夫という言葉を信じるしかない。

「たぶん、このさきもおなじくらいいのせいちようだと、おもう」

……多分、ともう一度弱々しくつけ加える。

いくらか速くなるかもしれないが、成長期の急な変化はやはり危険だから、劇的に、とはならないだろう。

それでも喋っている間ですら、覚束なかった言葉は明瞭さを増している。

変わらないのは女王のサクリアと、礼を尽くしたくなる威厳をたたえた目だ。

「宇宙意思とちようせつすれば、だいじようぶだから、あとで星の間にもいきたい」

聖地の時間は二日でも、外界はもつと日数が経過している。

レイナによってバランスは保たれていたが、女王であるアンジュのほうが適切な対処ができる。

急だったために時間経過はそのままだから、女王として復帰してほしいのは山々なのだが。

「……労働局が聞いたら怒られそうな話だね」

苦笑いするロレンツォの言葉に、うん、と全員がうなずいた。

誰の故郷だって、必要にかられないかぎり、幼児を働かせたりはしないはずだ。

女王というだけで、常識なんてものの外とさえそうなのだが——どうにも心苦しい。

守護聖だって、もつと上の年齢で就任したはずだ。「せめて、俺たちにも協力させてください」

ゼノの真摯な訴えに、小さなアンジュはにこつと笑って、もちろん、とうなずく。

「いつもならできるぶぶんも、みんなにしてもらおうとおもう。……よろしくお願いします」

「まかせろ！」

秒速で快諾するユエは勇み足にも見えるが、自信満々での返答はなにより安堵を運ぶ。

とはいえ、まずは身体のチェックからだと言いが告げて、精密検査をすることになった。

レイナに抱えられて去って行くアンジュを見送り、シユリはつきかけたため息を押し戻す。

いまだ残る同僚たちに、心配をかけたくなかったからだ。

起きてから部屋を出るまで、アンジュがシユリにむける視線は、あくまで一守護聖に対する——明確にするなら、他の皆と同一でしかなかった。

なおかつ、記憶は身体と同じ部分まで、という本人の言葉。

それが示す答えは簡単だ。

おそらく、今のアンジュは、シユリと恋人だったことを「知らない」

ある程度予測できていたことなので、シヨックがないとは偽れないが、まだ耐えられる範囲だ。

「……シユリ」

いつもなら塩対応のくせに、近づいてきたフェリクスが名前を呼んでくる。

秀麗な眉を下げて、痛みを顔に出さないよう必死らしい。

シユリのほうがつらいのだから——と耐えているのだろう。

なんだかんだで優しい奴だよな、と笑みを浮かべてしまったら、途端に不服げにされた。

「大丈夫だ。少なくとも俺は、こんなことで諦めたりしない」

アンジュと約束もしたし、たとえ誓っていないくても、諦めるなんて選択肢は選ばない。

力強く断言しすぎたか、フェリクスは驚いたように目を見開いてから、ふ、と綺麗に微笑んだ。

「すまない、僕らしくないお節介だった」

「いや……ありがたいとは思っている」

素直に言うのと、フェリクスはわずかに目をみはり、それから再び笑みを浮かべた。

以前なら、とりあえず言葉は聞いても、礼を告げることがはしなかっただろう。

表面上だけで聞き流して、余計な世話をとすら感じたかもしれない。

フェリクスだってそれをわかって、ただ視線を寄せただけだったのが以前の話だ。

アンジュが女王になる前だったなら、こんなやりとりはそも発生しなかった。

彼女が忘れていても、子供になっても、積みあげたものは失われていない。

アンジュの言葉が真実なら、欠けることなくもどってくるはずだ。

けれど、喉に刺さった小骨のように、引っかかり続けている小さな疑心。

信じているし、手放すつもりもないが、宇宙の前には守護聖とて矮小なものだ。

このままのペースなら、十日もかからず二十五歳に成長するはず。

それくらいは耐えてみせると、ミランの視線から微妙に目をそらしながら、何度目かの決意を固めるのだった。

検査の結果、内臓などに不審点は見つからず、健康そのものだったという。

意気揚々と彼女は星の間へ赴き、宇宙意思と数日ぶりの交信をした。

宇宙は安定していたし、守護聖も己のつとめを果たしていたから、緊急を要する力の発動はせず

「——見守りを頼まれていたんだ」

彼らの様子に気づかれる前に、シユリは即座に答えてやった。

みまもり？ と怪訝そうにするアンジュにうなずきながら、脳内で素早く、破綻のない説明を考えていく。

「なにせ突然のことでしたから、眠っている間に成長したり、それでもなくてもベッドから落ちたり……心配なことはいくつもあつたのですよ」

シユリが続ける前に、にこやかに口を挟んだのはサイラスだった。

いつもどおりの表情と声音は、流石の鉄面皮だ。本来のアンジュですら煙に巻くのだから、幼児が太刀打ちできるはずもない。

「そこで、気配に対してすぐ起きられる方々に、夜間の護衛も兼ねてもらったのです」

昨夜はたまたまシユリだったのだ、と言外に含めてみせる。

同じく笑顔でなにかも隠してしまうヴァージルも、にこやかな笑顔でそうですよ、とのたまった。

微塵も悪びれずに嘘をつく姿に、何人かがうわ、という顔をしかけた。……彼らにはもう少し、腹芸を身につけてもらわないと。

「レイナ様が適任とは思ったのですが、お子様の世話をしたことがないとのことで、男性ではありません

が、経験者に頼んだのです」

「レイナには、かわりに仕事をしてもらったもののね」しよぼんと申しわけなさそうになるアンジュに、レイナが何度目かの気にしていない旨を告げる。

どうやら、うまく納得してもらえたようだ。

「大分心配はなくなりましたが、念のため、今夜はレイナ様と眠って頂けますか？」

成長度合いはたいしたことがないし、緊急時のアラームもあるが、やはり心配になる。

少なくとも、一人で眠らせるのは論外だ。

上流階級の家庭では、小さいころから部屋に一人とロレンツォから聞いていたけれど、オウルの常識に合わせる必要はないだろう。

シユリは雑魚寝という名の集団で横になっていたし、アンジュも子供のころは両親と同じ部屋だったと言っていた。彼女の言う川の字はよくわからなかったし、恋人のようにふかふかの寝具でも、人数分足りていたわけでもないけれど。

サイラスの提案に、アンジュはあつさりうなずいてみせた。

同性だし補佐官だという記憶はあるからだろう、どこか嬉しそうですらある。

レイナは一瞬、シユリのほうに視線を寄越したが、

気づかれぬようすぐ顔をもどし、楽しみだわ、と微笑んでみせる。

「なら、俺たちは退散しよう、護衛が必要なら、また声をかけてくれ」

残っている守護聖たちがボロを出す前に退席を申しでると、ヴァージルがきらきらしい笑みを浮かべて「俺は毎晩でも構いませんよ」と混ぜっ返す。

おかげで追求されることもなく、無事に私邸を出ることができた。

邸を出て、敢えてのんびり歩いていると、後ろから近づいてくる微かな気配。

——ここへくる前は王立研究院のエリートだったはずだが、プロもかくやの忍びようは、どこで身につけたのだろうか。

「……で、どうなんだ？」

びたりと横に並んだサイラスに、主語を抜いて質問する。

「検査した時の年齢で、ではありませんが……：…：…身体の状態は、バース時代のデータとほぼ一致しています」

つまり正確にもとの姿をなぞっているわけだ。

身長や体重など、よく詳細なデータが見つかったなど感心したが、彼女が通っていた学校では、毎年計測がされていたそうで、つきあわせるのは容易らしい。

こんなところでもお互いの差異を感じるが、置いておいて、ひとまずほっと胸をなで下ろす。

データは暗記しているのだろう、手ぶらの彼はで

すが、と不穏な言葉を続けた。

「大変喜ばしいことではあるのですが、女王候補になるまでは、手術痕が残るような病気の経験がないかたなので、些かの懸念は残ります」

平和な地で育った彼女は、当然古傷もなかった。病歴も、自己申告では存在していなかったのかつてと同じだと断言するには材料が少ないのだ。

肉体的にはほぼ同一、しかし、彼女がどう過ごし、なにを体験したか——生身の記録は、最早ほとんど失われている。

「健康なのはいいことだがな」

「ええ。ですの念のため、記憶回復プログラムを設定しておきます」

オウルの高額医療で聞いたことのあるそれは、文字通り失った記憶をとりもどす治療だ。

ただし、あくまで「存在した」ものを復活させるものであり、

「……女王には必要ない記憶だ、と失われたままの可能性もある」

はじめから「ない」ものをつくりだすことなど、科学力の進んだ別宇宙であつても無理な話だ。

たしか、脳内に残ってはいるが、なんらかの障害で思い出せないものを強引にひっぱり出す方法だ。

技術の進んだオウルでさえ、かなりリスクのある処置だったし、とんでもない費用もかかる。

リスクも費用も、聖地でならあつてないようなものだが、成功するかは別問題だ。

もの言いたげな視線を感じたので「勘違いするなよ」と声に出す。

「絶望して言っているわけじゃない。だが、なんとかなると気楽に考えてもらえない」

前例はないから予測も立てづらいつし、それを言うならそもそも己が女王と恋仲だという事実がイレギュラーなのだ。

——たとえば歴代の女王であったら、同じ状況になっても、なにも心配はいらなかつただろう。

少しばかり記憶がもどらなくとも、女王としては問題ないのだから。

恋人がいる、という部分が、今回の事態をよりややこしくしてしまっている。

だからこそ不思議だ、とシユリは呟いた。

「俺以外の者は、恋人同士だった記憶が戻ろうが戻るまいが、問題ではないだろう？」

けれど守護聖たちはシユリに気遣う視線をよこし、サイラスは記憶回復の準備をしている。

王立研究院もバックアップ体制を完全に整えているから、表だつての反対はないのだろう。

意外とまでは言わないが、不思議な気がした。彼らにとつて大切なのは女王という存在だから、このままサクリアに問題がないなら、記憶は二の次

でもいい。

むしろ今までの歴史を鑑みれば、今のほうが正しいと言われてもおかしくない。

勿論、納得させるだけの事象は二人で積みあげてきたから、間違っているなんて言わせないけれど。

それでもこの機に乗じて、というのは大いにありえるはずだ。

だがサイラスは、大袈裟なほどに肩をそびやかしてみせた。

「アンジュ様はあなたと恋人同士の状態で女王になりました。つまり、宇宙意思がおふたりを認めているわけです」

たどえ他の宇宙では歓迎されないことでも、即位時には恋人同士であることは周知の事実だった。

宇宙意思とはやい段階から通じていたのだから、当然あちらも知っていただろう。

それでも宇宙意思は彼女を選んだ。

ただ、わざわざ吹聴することでもないの、外へはあまり通達していない。

いらぬ反発を招くだけだと判断したからだ。

見るものが見れば宇宙が安定しているのは明らかだから、女王の変更が無事になされた、と知れば、十分納得してくれる。

数値の上で問題がなければ、聖地の中でなにが起きていようと、外部には関係ないことだし、気づく

ものでもない。

「逆に、恋人であったことを忘れているほうが、不自然であると考えています。……ですが、このまま数値に異常がなく、むしろ好転すれば、記憶を取り戻さなくてもいいと考える職員も出てくるでしょう」
聖地で働く者も一枚岩ではないのだ。

この地へくることで周囲と長く離れることになる
と理解していても、思い切れるものではない。

家族できていればまだ抛りどころがあるが、一人者の場合、どうして女王だけが恋人とられるのか、と羨むことはやむなしだろう。

しかも、本決定まで情報は秘匿されているから、事実を知ってから辞退するとはいかないのだ。

「……私はあなたがた二人に賭けているのですよ」
ぼつんと投げられた言葉は、妙に温度があった。
数字にこだわる彼らしくない物言いだ、なにかしらの狙いはあるのだろうか。

あいにくシユリには読めないが、以前と同じく、味方であるならそれでいい。

「——とりあえず、元の年齢にもどるまでは、せいぜいこの状況を満喫するさ」

できやしないことを、さも本当のように呟いてみせる。

強がりだと笑ってくる相手でないと知っているからだ。

予想どおり、サイラスはそうですか、と淡々と答えただけで、暇乞いをするや女王の私邸へと踵を返した。

シユリも振り返ることはせず、まっすぐに、自室へ寝にもどることにした。

DAY:4

数日ぶりの自宅での目覚めだが、気分はどうしたって乗ってこない。

信じていると口にするのは簡単だし、かつてのアンジュを疑っているわけではない。

それでも、時と共に嫌な予想は大きくなるものだ。

仲間が帰ってこない時、協定を結んだ相手が戦闘開始しても動かなかった時——大抵いつも、ろくなことはなかった。

嫌な想像はどんどんエスカレートする、わかっている、明るくなれるニュースがないのだから、どうしようもない。

愛らしいアンジュは癒やされるし、彼女に対し声を荒げることは決してないが、己が彼女に抱くのは、敬愛と家族愛だけではないのだから。

忌々しげに舌打ちをひとつこぼして、時計を見れば聖地を一周する時間はありそうだった。

無心になって走るのもいいだろうと、すぐに着替えて外へ出る。

準備運動だけは忘れずにこなしてから、まだひやりとする空気を切って進んでいく。

なんだかという機械を持ち歩けば、己の普段の速度とか、体格に合ったどうのこうのが出るらしいが、いちいち比較する気はないので断ったままだ。

いつもよりペースを上げないように気をつけつつ、なるべくひとの少ない道を選ぶ。

——と、ほどなくして並走してきた男が一人。ちらりと視線を投げれば一瞬絡むが、すぐ逸れた。けれどそのまま、同じ道を駆けていく。

男の普段のコースは知らないが、ここまで被ることはない。

ほんの数秒分、己のほうが先に走っているから、こちらの進行方向を見極めて進んでいるのだろう。

ふるい落としてやるつもりで、朝のジョギングにしては本気の出したり、分かれ道でフェイントをかけても、涼しい顔でついてくる。

体力に自信のないものなら、とうにバテている時間走っても、降参する気配はない。

周囲は明るくなりはじめているので、そろそろ潮時だろう。

しかし、明確な区切りはなにか欲しい。走りながら考えて——公園へと進路を決めた。

公園の中には長い直線コースがある。舗装もされているから、速度も出しやすい。

考えはわかったのだろう、挑戦的にうなずかれた。そのままお互い声は出さなまま、くだんの直線では自然と全力ダッシュでの勝負になり、勝手にゴールと決めた女王像についた時には、流石に二人とも息が上がっていた。

押せば出てくる便利な機械——自販機から水を出した男は、ひとつをぼいと投げてきた。

受けとろうと手を動かし、ついボトルに目をやり、再び顔を上げた時には、彼の姿はない。

どこかの茂みに入り、気配を消して立ち去ったのだらう。

はじめから存在しなかったようにいなくなるあたりは流石と言うほかない。

追うことは勿論可能だが、意味はない。だからシュリは噴水の縁に腰かけて、水分補給をし、ひとつ重たい息を吐く。

「……まさかあいつに気を遣われるとは」
感謝なんてむずむずするが、そういうことなのだらう。

あちらも礼を言われても困るから、さっさと逃げたに違いない。

しかたがないので、ほとぼりが冷めたところに酒でもとけようと決める。

二度目の舌打ちは、朝のそれとは違う、面はゆい悔しさが滲んでいた。

女王の支度が整ったと聞き、わらわらと守護聖たちが昨日と同じサンルームへ集まってきた。

折角だし朝食を一緒にと呼ばれたのだ。

どうやらレイナが熱心に勧めて、アンジュが折れた形のようにだが、違和感なくシュリがいられる配慮なのだらう。

すっごく可愛いんですもの！ と熱く語っているので、もしかしたらシュリの件はついでかもしれないが。

思うところはあれど、そばにいたい気持ちがあるから異論はなく集合に応じた。

見た目はわずかに成長したらしく、補助椅子ながらも朝からテーブルでの食事となった。

これくらいの年齢になれば、地の守護聖も恐ろしくないようで、記憶やらなにやら、あれこれと質問を投げかけている。

あまりに矢継ぎ早なため、途中で他の守護聖に窘められていたほどだ。

先日までの様子からすると、見事なまでの豹変ぶりだが、このほうがあの男らしくもある。

念のためにとサイズオーバーのワンピースを着て、大きなリボンで腰を絞って調整しているアンジュの姿は、なかなか愛らしい。

「ごはんのあとは、しごとするから」

食後、パンくずをつけた状態で宣言するにはちぐはぐな内容だが、本人は至って真剣だ。

しかし、発言には全員が難色を示す。

「今は安定しているし、まだ休んでたって問題ない

んじゃないか？」

一番止める側にまわりにくいと思われているフェリクスだが、心配のほうが強いのだろう。

彼の言葉に、口々にそうだそうだと同意する。

女王就任後からしばらくして、日の曜日はよほどがないかぎり休日になっているが、問題があったことはない。

その程度には落ちついてきているのだ。

一日空く程度なら、大きなトラブルは起きないだろう。

だが、生真面目な性質は生まれつきらしく、彼女是不服げに頬を膨らませる。

たまらずにユエがつついてやると、ふしゅ、と擬音をつけてくれた。

「なにかあったら呼ぶつてことで妥協しろよ、な？」

「……じゃあ、ノア、いっしょにあそんで」

「——え。僕？」

ぺしんとユエの手をはたいた彼女は、とてとてとノアに歩み寄った。

一番遠い席についているので、自分から近づくことにしたのである。

手を繋げと無言で小さなそれをさしですが、彼は硬直したように動けない。

「でも、僕は……」

闇の力によって何人もの人間を眠らせた過去のあ

る彼は、ひととの接触を忌避する傾向にある。

守護聖同士なら大丈夫だし、勿論女王でも問題ないことが確認済みだ。

ただし、子供の身体ではなんともいえない。なにせここまで幼い事例がないからだ。

女王のサクリアがあるといっても、身体への負担が大きいかもれない。

悪い想像のほうを得てして働くものだ。ノアの躊躇いは当然のことだろう。

だがアンジュは頓着する様子もなく、あのね、と口を開く。

「おかあさんとアロマキャンドルをつくったことがあるの」

舌っ足らずな説明を要約すると、このころの一番印象深い記憶が、イベントで体験したアロマキャンドル作りだったらしい。

当然ひとりではつくれなかったから、一緒にいた母と——というよりほぼ親の力によるものだろうが

——製作したという。

しかし、今ここに彼女の両親はいない。

だが、できるだけ同じ体験をしたほうが脳への負担も減るだろうことは予測できる。

「ノアの執務室、そういうのあったでしょ、いっしょにつくろ？」

くいと遠慮がちに、だが譲る気はないと、手で

はなくローブの裾をひっぱる。

我儘を押し通そうとしているようだが、直接肌につれることはしない。

ノアの過去をある程度、把握しているようだ。

ここまで幼子に気を遣われて、なお断れるのは相当だろう。少なくとも、シユリには惚れた欲目を抜きにしても無理だ。

実際ダンブでも、よくガキどもの遊び相手をしていた。

ダンブの王が子供相手に本気になるなんて、と失笑されたが、己にとつては大切な時間だった。

そもそも、手加減すれば相手に伝わるものだから、決してしなかった。

結局、ノアが折れて、つくりかたがうる覚えだというアンジュのために、フェリクスが講師役として参加することになった。

さんざん迷ってから、おそろおそろといった様子で手を繋ぎ、フェリクス先導で歩く姿は親子のようだった。

夢の守護聖なら、万一ノアの力が発動しても気がつけるし、適任だろう。

その間、他の守護聖とシユリはおのおのの仕事をこなすことになるが、かれらに任せておけば問題はない。

四六時中ついていては、また不審感を持たれかね

ないし。

どうせ「念のため」と称して録画されているのだから、貴重な一瞬を見逃すこともない。

……あとで本人に見るな、と顔を赤くして叫ばれそうだけれど。

——そうだった未来を想像して笑いながらも、どうしたって苦さを味わうことになった。

結局、幼いアンジュは午前中いっぱい使ってアロマキャンドルをつくりあげた。

身体の変調もなく、順当に成長しただけであることは、昼食時に集まった時に察せられた。

サイズが厳しくなってきたのと汚したからとで、新しいワンピースはフェリクスが吟味したらしい。

キャンドルはあまり凝ったものにしなかった代わりにいくつも作成し、ひとつはノアと交換したと嬉しそうに報告してくれた。

疲れてはいるのだろうが、達成感からにこにこ笑顔のアンジュの隣には、照れくさそうにはにかむノアの姿。

双方にとつてよい時間になったのだろう、喜ばしいことだ。

何人か同席しようとしたのを止めたのはユエだったが、正解だったのだろう。

「いっぱいつくったから、みんなのぶんもあげる」
よいしょと運ぶ姿は小動物のようで、少々危なっ
かしくもある。

だが、止める無粋をする者はいなかった。

流石にキャンドルの大きさは小さなものだが、蠟
燭はそれぞれ、守護聖たちのイメージカラーになっ
ている。

中に入っているものなども意識しているのだろう、
それぞれが異なる意匠だった。

彼女は当然のように、シュリにも手渡してくる。

順序はこだわっていないのだろう、端からだった
からまんなかほどだ。

ありがとうと受けとったそれは、予想どおり、赤
い色でできている。

しかし、中に入れこまれているものを見つけて、
悟られぬよう息を潜めた。

赤いドライブフラワーなどは、いい。この手のもの
にはよくある装飾だからだ。

だが、普通につくればあまり入れられるはずがないと
思う——シュリは詳しくないけれど——それでも不
可思議なものがある。

バラバラの、おそらく古い時計の部品たちだ。

歯車に秒針にといった細かなものが、赤く色づい
た瓶の中に沈んでいた。

およそ、幼児が選ぶモチーフとは思えない。

——女王としての記憶に、シュリの時計は必要な
のか。

正直、どちらとも答えられない。

今のシュリへと変じた大きな事柄だが、あの時の
二人は、恋人ではなかったが女王候補と守護聖とし
て、適切な距離感であったかというとまた別だ。

持って回った表現を脳内ですてしまうくらい、つ
まりは違和感がある。

だが、渡してきたアンジュの表情に変わったとこ
ろはなかった。

相変わらずご機嫌に、守護聖たちから感謝されて
無邪気に笑っている。

この状況では、いくら他の者が二人の関係を知っ
ていても、個人的に問いかけるのは難しい。

話題に出せば、守護聖たちに気を遣わせる可能性
も大いにある。

気になるが、とりあえず訊ねる機を探すしかない
だろう。

「じゃあ、午後は俺様と遊ぼうぜ！」

「うん、ユエと遊ぶー」

ノアばっか不公平だ！ と子供のように騒ぐ首座
の誘いに、すなおにうなずき、なにをするのかと思
えば「次は運動だ！」と叫んで早速肩車をした。

高い視線が珍しいのだろう、快哉を叫ぶあたり、
面白がっているようだ。

そんな姿はただの幼女で、時計についてやりとりをした面影はない。

どう思うかと問いかけたくとも、明確な答えを持つ同僚などいやしない。

喜ぶ少女が近づいてくるのを察し、どうにか表情をとり繕うしかなかった。

——そんなこんなで、午後はユエの肩車から、そのまま騎馬戦もどきへと発展した。

騎馬戦とはいえ、肩に乗っているのはアンジュだけだ。

ヴァーシルの肩に年少組が乗るかという話になったものの、アンジュとの差が大きすぎるということでやめになった。

そもそも、本来の騎馬戦ならアンジュからバンダナかなにかを奪わねばならない。

しかし守護聖の誰もが、たとえ試合でも子供の彼女に無体を働くなんてできないと、戦う前から白旗をあげたのだ。

とはいえなにかしら勝負があったほうが面白くなるのも事実だし、アンジュも納得しなかった。

結局、ユエに乗ったアンジュから一定時間避け続けたら勝ちというルールのもと、庭を使って走り回った。

それでも手を抜かないかぎり、勝敗は明らかかなので、守護聖たちはトレーニング用の重りをつけたり、二人三脚状態にしたりとハンデをつける。

運動が苦手な面々は早々に負けて、それにアンジュが文句を言ったりしたが、概ね平和に終了した。

その間にも少しずつ成長していたようで、十歳になるかならずというところまで至っていた。

試合が終わったあとに、ユエが重い、と呟いてどつかれていた。なりは小さくとも、ちゃんと女の子だ、当然だろう。

子供に合わせた早めの時間に夕食をすませると、今夜も夜はレイナに任せることにした。

アンジュのほうも一人は不安だろうから、選択に否やはない。

夕食の際にきやあきやあとはしやく姿は姉妹のようで、フェリクスが無心でスケッチしていた。

請われれば己がそばにつくが、記憶のない現状では無理だろう。

実際、アンジュは負担になると悩みながらも、女子会みたいなものよという言葉に笑顔を見せて、レイナと寝ることを了承した。

軽く寝酒をひっかけて寝てしまうにかぎる、とかぶりをふって、早々に邸へもどることにした。

DAY:5

——すくすくと成長する子供を見守る、という事実だけを述べるなら、悪くないものだ。

スピードが速すぎるとか、感じるサクリアに平伏しそうになるとか、通常と異なる面はあれども。

聖地にも子供はいるが、成長する前にもとの場所へ帰ってしまう。

一人の育つ姿を見るなんて、守護聖である間は叶わない。

今日も朝食をみんなでと声がかかり、全員が集合した。

なんだかんだで集まるあたり、シュリだけが皆勤賞で怪しまれないようにという気遣いがあるのか、それとも楽しんでいるだけなのか。……後者が多い気もする。

アンジュが就任する前の関係性だったら、もし女王が子供になっても、皆で集まっただろうか。

……そもそも秘匿されて、気づかない可能性もある気がした。

それほど、当時の女王と守護聖の関係は希薄だったし、守護聖同士だってそうだ。

どうしてそれでいいと思っていたのか、今ではわからないが、わからなくなつてよかった、とすなおに思える。

ベースの食生活にならつた食事なので、慣れない守護聖たちはこつそり別メニューにしてもらつたり、味つけを足したりしているが、決してアンジュには気づかせない。

かくいうシュリも、かつての味と異なることには気づいていた。

アンジュと共に過ごす休日に、彼女は故郷の料理をつくることもあつた。

シュリはそれに対して正直に感想を述べて、その結果、味つけは変化し、互いにとってちようどいい味へ落ちついた。

躊躇なく思い出の味を変えてしまったため、シュリのほうが不安になつたものだ。

「……いいのか？」

手料理に馴染みのないシュリにはよくわからないが、思い出の味というなら覚えがある。

それが変わってしまうのは、一抹の寂しさを伴うものだ。

「レシピはとっておきますから。他人同士の好みは合わさつて、我が家の味になる……つて、いいと思いません？」

家、というものには料理の味も含まれるのだと、彼女の言葉で気づかされたものだ。

今の味は相談しあう前と似ていて、懐かしさ半分、やはり恋人である彼女の記憶はないのだと、まざま

ざとつきつけられ、胸に重しが入ったようだった。

「ねえ、アンジュ、今日はなにをしたい？」

ノアも近くにいることに慣れたようで、すぐそばの席から躊躇いなく問いかける。

王立研究院からは、今日は星の間に行かなくても大丈夫ですと太鼓判を得ていたので、説得も容易にすんだ。

よって、本日も女王業は休みとなる。

やや不服な様子を見せたものの、表示されたデータを正確に読みとった彼女は、嘘がないことに納得し、全力で遊ぶ方向にシフトしたようだ。

いくらかは、子供の心に引きずられていているらしい。んー、とかわいらしく悩んだのち、指名された今日の相手はゼノとミランだった。

学校でやった木材の加工が面白かったことと、夏休みの盆踊りが印象に残っているからだと理由を教えてくれる。

他の記憶もあるだろうに、無意識なのか敢えてなのか、守護聖一人一人、なるべく平等になるようにしているフシがある。

とはいえ、選ばれて喜ばない者はいないから、なんの問題もない。

一度に両方は難しいし、盆踊りは夜だったというので、順序はすぐ決まった。

「俺はどっちかという機械加工が得意だけど……

たまには昔ながらもいいね」

そう言いながらゼノと相談して選んだのは、オルゴールの木箱作りだった。

板を切り、組み合わせて、蓋の部分には彫刻をするというものだ。

ゼノいわくの原始的な機械を使って綺麗に木材を切っていくさまを、小さなアンジュは興味津々に眺めていた。

切り終わったあとのヤスリかけを任されて、子供の用のゴーグルと、ゼノとお揃いの作業着でご機嫌に紙やすりを使っていく。

中に入れるオルゴールは、見た目こそアンジュの故郷のものに近いが、内蔵されている曲は膨大で、経年劣化もしづらいものだ。

組み立てても手伝ってもらい、外の形ができあがる。蓋の部分に、アンジュはデフォルメした鼻を彫ることに決めていた。

まだ成長しきっていない手で刃物を持つことに何かは難色を示したが、経験のうちだと押し通した。

ゼノと仲のいいカナタと、この手の作業が好きなフェリクス、つくらないが茶々を入れるミランもいて、部屋はかなり賑やかだ。

ユエも参加したがったが、流石に仕事をしなければならなかった。

教師役のゼノがいるし、人数も多いからと、シユ

リは途中で撤退するつもりでいたのだが、

「シュリ、彫りかた、おしえて」

箱を組みたて、いぎ彫刻の段になり、当然のように声をかけてきたものだから、一瞬反応が遅れてしまった。

フェリクスたちが困惑気味の表情をして、慌てて表情をひきしめているのが視界の端に映る。

さっき彼女は、自分を指名しなかった。

だから、かつて手慰みの趣味だと教えたが、覚えていると思っていなかったのだ。

女王としての彼女に必要な記憶だろうか、と悩んだのは数秒で、わかった、と彫刻刀を手にする。

真剣に見つめる彼女に、ゆっくりと手を動かして教えてやる。

横に並んで真似をする様子を見て、力の入れかたなどで何度か声をかければ、危なっかしい手つきからは卒業した。

図案は簡略化した梟だ、注意していれば怪我もないだろう。

「シュリは、なににするの？」

まっすぐに見つめられて、どうしたものかと悩んでしまう。

中座するつもりだったから、そこまで考えていなかった。

そもそも普段彫っているものとは微妙に異なり、

こちらは平面だ。

しばらく悩んでから、デバイスで写真呼び出して、ざっとあたりをつけて作業をはじめると、シュリが選んだのは、とある花だった。

かつての会話で、たしか彼女はこの話題を出したことがある。

当時は花を彫った——と、言っていたはずだ。

現物は当然ながら手もとにない、同じものにはできなくても、少し悲しい顔をさせるかもしれないけれど——他に浮かばなかったのだ。

参加した面々も、刃物を扱うということで見目作業したため、会話は少なかつたが、悪い気はしなかつた。

アンジュのものはフェリクスがデフォルメした図案のおかげもあり、なかなかのきになった。

参加していた面々の完成品を見たがるアンジュに、隠すのとも見せたところ、ぱっと顔を明るくした。

「シュリ、すごい！」

「本当ですね……とても繊細です」

嫉妬するでもなく、すなおに称賛してくる若人たちに、なんとも落ちつかなくなる。

だが、枝の部分にこだわりすぎて、肝心の花部分はまだ手つかずに近かつた。

これでは、なんの花かよくわからない。

シュリとしては妥協せずに完成させたいので、持

ち帰って後日作業することに決めた。
——この先、帰ってきた彼女に見せて、懐かしめるようにと。

昼食を挟み、午後からはミランと広場で踊ることにしたらしい。

オルゴールを私邸に置き、それからユエを手伝って仕事を片づけ、適当な時間に様子を見に行く。

妹がいた彼にとっては慣れたものだろう、共にくるくと飛び跳ねるさまを遠巻きに眺めていると、同じようにしている何人かを確認できた。

ミランの踊りはいつ見ても流石の一言で、見よう見まねで踊るアンジュも、徐々に形になっていく。

あの中に混ざるのは、なかなか気が引けるのだが、許してくれるミランではない。

「いつまでも見てないで、一緒に踊ろうよ!」
ついには、くすくす笑いながら次々にひっぱりだされていった。

勿論シュリも例外でなく、強引さに辟易したが、アンジュが楽しそうなので少しだけつきあう。

とはいえ、踊りなんてものはどうにも慣れないので早々に離脱した。

つきあいのいい面々はまだ踊り続けているので、まあいいだろう。

しばらくしてミランの舞は終わり、今度はアンジュの番だ。

少女の言っていた盆踊りとやらは、あまり難しくなく、どちらかというと静かなものだった。

ゼノが用意してくれた音声再生装置から、定期的に太鼓の音が響いてくる。

たくさんいたほうがいいから、と請われて、断り切れずに円に加わった。

ふりつけも簡単で、難しくないことも理由だったけれど。

「盆踊りには意味があつて」
故郷の装束だという浴衣を身にまとった少女は、

くるくると回りながら説明する。これが作法なのだと言つて。

腰に巻いた大きな布は、一枚のはずなのに、背後でかわいらしく結つてあるのが不思議だった。

「亡くなったひとに対する踊り、つて教わたの」
騒ぐのもあるみたいだけど、とつけ加えられ、まあ、変化するのは当然だろう。

「お盆つていう、亡くなったひとがかえってくる時期にやるから、円の中に混じつても、気にしちゃいけないよつて」

なるほど、だから大人数でぐるぐると回り続けるわけだ。

同じ場所がいなければ、途中で一人二人増えても

気づきにくい。

ここにはさして人数がいらないが、本来の祭の人数と、灯りの少なさなら悟られないですむ。

そもそも、たとえ霊が存在するとしても、聖地に入れるとは思えないけれど。

……いや、ミランが本気を出せば、人外の数体は呼びそうではあるが。

ちらりと彼を見るが、楽しそうに踊っているだけのようだ。

同じような踊りだが、アレンジしたのか、明らかに難易度が高いものを、苦もなくこなしている。

同じように踊っているはずなのに、彼の周囲だけどこか空気が異なるのは、ミラン個人の持つ力ゆえだろう。……と、思いたい。

「——シュリも、会いたい？」

不意に視線がまじわり、唐突な質問が投げかけられた。

まっすぐな瞳に見つめられ、喉がひりついたように二の句を失う。

誰を——なんて、訊くまでもない。

だが、今の彼女が知るはずはない。

なんと答えるのが正解なのか、シュリにしては長い時間、思考停止してしまった。

質問の内容をつかみあぐねるうちに、アンジュはくるくると再び円にもどってしまふ。

それきり彼女は質問してくることはなく、その夜はお開きになってしまった。

DAY:6

「——今日から、最低半日は仕事をします」
翌朝のアンジュは、見たところ十五、六歳程度になっただけ。

青い目は真剣な色をたたえて、決意に満ちた様子できつぱり宣言する。

ユエがいやでも、と言いかけたが、鋭い目に二の句が継げなくなつた。

昨日までの少女らしいあどけなさはなりを潜めている、今の彼女は間違ひなく——

「あちらの女王陛下も同じくらい年齢で即位したんだから、いまの私が駄目ってことはないでしょう？」

感じるサクリアは間違ひなく女王のもので、小さな前との強さと大差なく、かつ思わず跪きたくなる力にあふれていた。

アンジュ自身が即位した年齢には及んでいないが、守護聖の誰もがサクリアを感知し、反対する理由がないことを悟ってしまった。

「——とはいえ、自分でもどうなるかわからないから、とりあえず午前中働いてみて、様子を見たいの、いい？」

「……陛下がそう仰るのなら」
自然とユエも陛下と口にして、言葉遣いも改めて

いる。それがなによりの証拠だった。

かつてより幼いけれど、なんら遜色のない女王の姿——だが、シュリにはとても、よかったとは喜べない。

女王の衣装もほとんど余ることなく着られそうだというので、久々の装束を身にまとい、聖殿の奥へと消えていった。

きちんと計測するのはあとだろうが、背丈などは大分近づいている。成長著しい年齢だったのだろう。

今の宇宙はそこまで揺らいでいなかったが、数時間後に回ってきた王立研究院のデータを見れば、明らか違いが出ていた。

さざなみのように浮かんでいた小さなズレが、すべて均等になっている。比喩としてはそんなところだろうか。

今はさしたる影響が出ずとも、放置していれば大きくなり、積み重なればかつてのようになる。

やはり、守護聖だけでは宇宙はどうにもならない。女王あってこそその守護聖なのだ、データを見れば嫌でもわかってしまう。

守護聖も必要だが、己たちだけでは完璧にはできない。
かつて感じたもやつきに、シュリは小さく舌打ちするのを止められなかった。

まだ成長しきつたわけではなく、記憶も不確かな

状態だ。

不安要素ばかりなのに、彼女が星の間へ行くことを誰も止められない。

女王として存在されてしまえば、首座も、シユリも、なにも言えやしないのだ。

「……クソ」

悪態はよくないですよ、と窘める声は、どこにもない。

大きくなったしと昼食に招かれることはなかったのだが、サイラスから報告はとどいていた。

病み上がりではないが似たようなものだからと、午前中で仕事は切りあげるようにサイラスとノアからの説得があったらしい。

体調に問題はないし、肉体の数値もおかしな部分はない。

だから身体の疲労というよりは、成長した肉体への適応や、サクリアとのかねあいだろう。

一度に行使しすぎても、負担がかかるかもしれないと説明すれば、すんなり引いてくれたとあった。

半休となったアンジュはなぜかジャージを着て、同じく勤務中のはずだがジャージのカナタと共に広場でストレッチをしている。

サイラスの報告の末尾に「人数合わせにお願いし

ます」と呼びつけられたのは、シユリとヴァージル。この時点で概ね検討はつくというものだ。

しかも、動きやすい服装だといいかもしれません、なんて指定もあれば、なおさら。

ただ、同じように連絡はあっただろうが、己もヴァージルも守護聖の服装のままだ。

シユリたち守護聖はまだ勤務時間内だし、この格好でも問題なく動ける。

互いに無言で顔を見合わせ、ストレッチする若人に近づいていく。

「高校時代は結構走ってたから、いい線いけると思うよ」

聞こえてくる意図的に砕けた口調は、年相応の、まだまだ少女と評していいだろう。

この時代は長くしていたらしい髪の毛をひとくくりしながら、カナタへと挑戦状を叩きつける。

対するカナタも不適な表情で望むところだよ、と返した。

「……これ、我々ほどの程度本気を出すべきですかね？」

「知らん」
真剣に悩むヴァージルにぞんざいな返事をしてしまふ。

ただ、勝っても負けても面倒くさそうなことだけはたしかだ。

妙にぬかりのないサイラスによって、スタートラインとゴール地点が設定され、合図にと気の抜けそうな鳥の鳴き真似が披露された。

およそ百メートルほどの距離で順位を競ったわけだが、シュリ予想どおり、本気を出せば悔しarella、さりとてハンデを与えても不満を漏らされる。

短距離にはじまり、ギャラリーの守護聖を巻きこんで球技だなんだと品を変えて、夕方近くまでスポーツに明け暮れることになった。

流石のシュリも最後には息が上がっていたが、ヴァーゼルもなので己が腑抜けたせいではないと思いたい。

「あー楽しかった！」

「そうだね」

ただまあ、若人が無邪気に喜んでいるので、結果的にはよしとすべきだろう。

途中から参加したゼノたちとにこにここと笑い合い、今日の感想を述べあう姿は、シュリは知らないが「学校」という場所で見かけたものによく似ている。

己やヴァーゼルがそこへ混じっても、どうしたってコーチが関の山だ。

べつに、かれらの間に恋愛感情はないとわかっていても、しっくりくる姿に対し、はやく成長してくれと願うようになる。

「さあさあ、食べ盛りのみなさん、山ほど料理をこ

用意しましたよー」

ちようどいいタイミングでサイラスが手を叩きながらやってくる。

どうやら参加者全員分の用意があるらしい。

断る理由もないので、ヴァーゼルとちらりと視線をかわすと、飛び跳ねん勢いの若者のあとをついていった。

——どう見てもパジャマではない、外出のできる服に身を包んだ不審者が、女王の私室からこっそりと出てくる。

きよろきよろと周囲をへたくそに見渡して、誰もいないと判断したのだろう、足音を殺そうと頑張りながら歩いていく。

子供むけの映像を見た、コミカルなドロボウのような動きだが、笑いの衝動は起きなかった。

「……どこへ行くつもりだ？」

ずぶの素人にいつまでもつきあっていられないので、シュリはさつきと姿を現して声をかけた。

ぎゃあと色気のない悲鳴をあげた少女は、灯りを手にした私服姿の己を見て、なんで、と呟く。

「こんな夜中に、なにしてるの」

「それはこちらの科白だ」

身体が変化し続けているせいか眠いのだと言って

早々に休んだはずだが、どうやらあの発言は嘘だったらしい。

いくら聖地が安全といっても、こんな深夜に出歩いていいわけがない。

喉が渴いたのなんだから、室内で事足りるはずだし、サイラスを呼ぶことだってできる。

流石に大きくなり、私邸で一人で休むことになったから、レイナはそばにいないが、声をかければすぐ駆けつけてくれるだろう。

部屋を抜け出す必要性はどこにもないのだ、通常なら。

ただ、万一なにかがあつてはということと、シュリ自身が心配だったので、不寝番を引き受けて認められたのだ。

この成長スピードなら、あと一日二日でもとにもどる。それまでの徹夜ならさして問題にならないと判断した。

なにより、他の誰も女王の私室には近づけたくないのだ。

アンジュはどこまで理解したのかわからないが、じいっと青い目でシュリを見つめてくる。

年齢にそぐわぬ叡智が見えるのは、やはり女王だからなのだろうか。

少なくとも、恋人の彼女とすごしていた時には存在しない視線だ。

女王からただのアンジュになると、それはもう気の抜けた状態になる。

真剣な表情になることもあるが、それも女王の時とは性質が違う。

どこにも女王の片鱗を残さないほどの徹底ぶりは、彼女自身の心を守るために必要なことだ。

緊急の連絡があれば顔が変わるが、なるべくそうならないよう、周囲も気を配っている。

そこに至るまでは色々あったわけだが、今の彼女は知るよしもない。

記憶がない彼女は、切りかえがうまくできていない可能性が高い。

個と女王が混在していても無理はないが、となると精神的な負担が気にかかる。

数日だから大丈夫だろう、とは思えない。

宇宙に存在する、それこそ数え切れない諸々を共有するのだから。

違和がないかじつと見つめていると、居心地が悪いか、視線をそらされた。

そういえば目つきが鋭すぎるというのが最初の感想だったから、恐がらせたかもしれない。

「……まあ、ちようどいいや。少しつきあってくれない？」

「眠れないのか？」

気遣うシュリの問いには答えず、出てきたばかり

のドアを開けて、入れと示す。

夜中に女性の部屋に入るといのは響燈を買う行為らしいが、本来二人は恋人同士だ。

サイラスも認めているからこそ、シユリがここにいることを許してくれた。

だからまあ、いいだろうと考えて、アンジュに続いて中へ入る。

ただし、扉は開けたままで。

平素なら閉めて鍵もかけるが、今のアンジュはシユリの恋人のアンジュではない。

当然の配慮であり、マナーだと考えた。

昔のシユリなら防犯的に耐えられないが、今なら平気なのだから、随分な変化だと思う。

だがアンジュはシユリの配慮を無視し、すたすたと進んでいくと、あるうことかベッドにちよこんとすわって手招きした。

なにを考えているんだと叫びそうになるのをどうにかこらえたが、眼差しは相当に悪くなっているだろう。

先ほど、できるだけ柔らかく、と考えていたが、放棄せざるをえないようだ。

「ねえシユリ、えっちしよう」

おまけに、どういうつもりか問いかけるべく近づいたところで、さらなる爆弾発言がたまされた。

ぎゅ、と眉が寄った自覚はある。アンジュも「う

わこわあ」と本気だか冗談だかわからない口調で呟いた。

「寝言は寝て言え」

ベッドに縛りつける……のはまずいから、實巻きにして強引に眠らせてやろうかと考えてしまった。

日中あれだけ動いたのだから、暖かくしてやればすぐに落ちるだろう。

ダンブの悪ガキども相手に経験しているので、十分できることではある。

だがアンジュはけろりとした顔のまま、ベッドの上から声をかけてくる。

「本気だつてば。JKだよJK、ぴちぴちだよ」

意味不明の単語が使われたが、多分中味は知らないほうがいい。

やはり問答無用で寝かせたほうが良いようだ、苛立ちを隠す気もなくさらに足を進めた。

たしかに己は恋人のアンジュとは何度も肌を重ねているが、今の彼女とそういう関係を結ぶつもりはない。

若い娘がいいだの、下世話な考えをする連中と一緒ににされるのは心外でもある。

大体、年若い少女が簡単に投げだしていいものでもないはずだ。

注意しようとしたシユリだったが、ふっと暗くなった表情に叱る言葉を失う。

「——今の私は処女だけど、明日にはそうじゃなくなるかもしれないでしょ」

眩きながら、アンジュは膝をかかえた間に頭をもぐらせてしまった。

一段落ちた声のトーンに、捕まえようとしていた手が止まる。

「その相手が誰になるのか、今の私にはわかんない。……ヤなやつかもしれない。でも、成長するってことは、たぶん、そういうこと、でしょ」

微かに震える声と肩に、はっと息が詰まった。

誰も、今の彼女に本来の年齢や、細かい話は伝えていない。

シユリと恋人であるというだけでなく、試験時のことも一切含めてだ。

未来を伝えることが歪みになってはいけないとの総意からだった。

けれどもどつていく記憶や、周囲の態度を見ていれば、まだ先が——自分が成長していくことは想像できるだろう。

宇宙意思との交信でも、引つかかるものがあつたのかもしれない。

人生において経験していくのは、なにも嬉しいことばかりではない。

幸と不幸が半分とか、いや不幸のほうが多いとか、論はいくつもあるが、要するに悪いこともたくさん

起きていく。

——思い出すのは、ダンプで暮らしていた女たちのこと。

ほとんどの女は処女を望まぬ形で失っていて、愛しあつた結果なんて物語の中だけだった。

なぜと違ってそれには価値がつくからだ。明日の食事に困る生活においては、売ってもいいと選んでしまうほどの大金が得られてしまう。

さらに相手に気にいらなければ、綺麗な服やアクセサリーを身につけることもできるし、十分な食事と寝床も与えてもらえる。

単純な力ではなかなか強くなれない女にとっては、身を守るために己を売ることが、選択肢の上位に存在していたのだ。

シユリがダンプで力をつけてからは、できるだけ彼女たちを保護するように動いたが、どうしたって限度がある。

本当に好きな相手と結ばれるまで清いままなんて、あの場所においては奇跡に近かった。

アンジュの家庭環境はそこまで劣悪ではなかったというが、きちんとした判断ができない少女につけこむクズはどこにでも存在するのだろう。

犯罪者とはいかなくとも、右も左も知らぬ世間知らずを丸めこみ、あとから思い起こせば欲のはけ口に使われたのだと気づくケースもあるに違いない。

アンジュとは、お互いはじめてではないとわかった時点で、それ以上の詮索はしなかった。

今にして思えば、嫌な過去があったかどうかだけでも聞いておくべきだった。

シュリとのセックスでトラウマめいたものが出たことはなかったの、おそらく望まぬ行為の経験はないだろうが、そんなあやふやな情報など、今の彼女にはなんの意味もない。

そもそも、今のシュリがアンジュに伝えるわけにもいかない。

どうして知っているのか訊ねられれば、己との関係を告げるしかない。

深い仲でなければ、この手の話題が出るはずもないから。

だから今、シュリがとれる手段はとてもし少ない。顔を伏せたまま黙りこむアンジュの頭に手を伸ばし、そつと髪を撫でてやる。

びっくりと反応したが、顔は上がらない。美しい青い瞳も、当然見えないままだ。

「ガキを相手にするわけにはいかない。だが、そばにはいてやるから、ちゃんと休め」

できるだけ優しい声になるよう苦心しながら囁きかけると、ゆっくりと頭が持ちあがった。

想像に反して泣いてはおらず、まっすぐに強い視線がぶつかる。

負けん気の強さがあるのは、幼いころからなのだろう。

「——せつかくのチャンスなのに」

なによ、と拗ねたように呟きつつ、その顔はどこか安心したような、納得したようなものに落ちついている。

少なくとも、捨て鉢で他の誰かのもとに突撃することはなさそうではとほつとした。

想像すらしたくないが、守護聖数名は、今の彼女に頼まれたら寝室に招きそうだからだ。

勿論、なにがなんでも阻止するけれど。

「じゃあせめて、一緒に寝てよ」
ぼんぼんとベッドを叩かれて、逃亡防止のためだといいわけてうなずいた。

眠るには少々窮屈な服装だが、頓着してはられない。

もう少しくらいは背が伸びるし、成長途中の骨格だからだろう、いつもより細くて小さい。

子供と大人の境目にあるのは、肉体も、精神もなのだろう。

性を感じさせない抱擁をして、ぼんぼんと背中を叩いてやる。

挨拶のキスは習慣になかったと聞いていたから、やめておいた。

「朝には、何歳になつてるかなあ」

眠っている間の成長はゆっくりなので、一歳増えるかどうかわかるが、それでも知らぬ間に変化するのだ、恐ろしいだろう。

それに伴って思いだす記憶も含めれば、なおのことだ。

呟いた声は、少しだけ絡まって響いた。

シュリのシャツをつかむ指先に色は塗られておらず、短く切っているのが少女らしい。

「何歳だって、お前はお前だ」

どう言えば安心するかなんてわからない。

普段だってまだ手探りなのに、今の少女相手ならなおさらだ。

けれど、どの姿だってアンジュであることに変わりはない。それは自信を持って言える。

シュリの言葉に返事はなかったが、力を抜いて目を閉じたので、余計なことは続けず、ただ眠るまで背をなで続けることにした。

DAY7

ぼんやりと目を覚ました少女は、よくわかかっていないのだろう、温もりを求めるように目の前のものに——つまりシュリの胸に身を寄せた。

こいつはまだガキだ、と思っっているから、どうこうする気は起きない——が、ため息をつくのはしかたがないだろう。

子供だと思っけていても、身体は大人成長しているのだ。色気のないパジャマだって、柔らかい肉体があることを隠しきれはしない。

自分以外だったら、押し倒されても文句は言えないだろう。

「ほら、さっさと起きろ」

覚醒しかけているならいいだろうと、とんとんと背を叩いてやる。

いつもならぎりぎりまで平和な寝顔を堪能したり、起きない程度に髪を撫でたりするが、今はそうもいかない。

やがて、不明瞭な呻き声をあげながら、空色の瞳がゆっくり開いていく。

その中に映る己の姿は同じなのに、と、どうしようもないことを考えかけて、

「——シュリ」

甘い声で馴染んだ調子でに名を呼ばれたものだから、

ら、思考が飛んだ。

衝動のままに抱きしめかけて、踏みとどまれたのは奇跡に近い。

一瞬後のアンジュの顔は——瞳は、シュリをただの「炎の守護聖」として見るものにもどっていたから理性が働いたのだ。

「あれ、えっと……なんでシュリがいる、って、あ
|……」

声に出しているうちに思い出したのだろう、ぼつが悪そうな表情になる。

ふ、と気づかれぬように詰めていた息を吐きだし、にやりと笑みを浮かべてみせる。

「目が覚めたなら、俺は一度帰っていいか？」

視線を下にやるシュリにつられて、すがりついて

いることに気づいたアンジュは大慌てで手を離れた。執務が再開されている現状では、私服でいるわけにはいかない。

邸にもどってシャワーを浴びるくらいは、最低限しておきたいところだ。

誰かに見られてもシュリは困らないが、今のアンジュは動揺するだろう。

「まだ少し早いから、遠慮なく二度寝するといだらう」

ぼんぼんと頭をなでてやってから、ベッドから降りる。

「あの、……：……ありがとう」

背中にかけてられた声に右手を挙げていらえにする
と、シュリは部屋をあとにした。

出て数歩の距離に執事が立っていても、特に驚き
はしない。

「今から戻るとお伝えしておきましたので」

並んで歩きながらの手配に、礼は言わない。

不寝番を認めたのだ、これくらいはするだろう。

「おそらく明日には、元の年齢になるでしょう」

「今日中ではないのか？」

朝の時点ではあまり変化がなかったが、それでも
そろそろ二十歳くらいになるだろう。

そこから五年ほどなら、今までのスピードでい
けば一日で達していたはずだ。

だがサイラスは、記憶の問題でしょうね、と分析
する。

「眠っている間に記憶の整理がなされているよう
なので、それを踏まえると、完全にもどるのは明日で
はないかと」

なるほど、と納得する。

身体が成長するに従って記憶もとりもどしている
ようだが、それをきちんと脳に収納とでも言おうか、
あるべき場所におさめるには、休息が必要なのはも
つともだ。

まめに色々調べた予測らしいし、王立研究院なら

精度も信じられる。

「ですので本日夕刻、仕事のあとにお時間をいた
きたく」

「……それは、かまわないが」

これ以上話すことなどあるだろうかと疑問だが、
今聞いてもどうせ答えないだろう。

どのみちアンジュの様子が気がかりなので、ここ
へ寄るつもりだから、サイラスから誘われるなら堂
々と訪問できる。

ちようど玄関にたどりついたところで会話は終了
し、サイラスはにつこりと微笑むと、丁寧に一礼し
てみせた。

守護聖としての衣装に身を包んでむかった聖殿で
は、昨日よりさらに女王のドレスが似合っている彼
女がいた。

服に着られている印象は、もうどこにもない。

ほぼ身体の成長は終わったのだろう、それに、先
日結ぶほどだった髪の毛は、はじめて会ったころよ
りはやや長い、それでも短くなっていた。

今は結っていることもあり、ぱつと見たところは
もとの姿に見えてしまう。

「今の気分は大学生です」

だが、本人の言葉により、まだなのだと知れた。

とはいえ彼女の故郷では成人している年齢だし、女王としての記憶は完璧なので、彼女は数日の滞っていた分をとりもどす勢いで仕事をしていった。

女王のサクリアが足らずに、いくらか乱れていた宇宙も、問題ない程度までおさまっていく。

その速度は、かつてより速い気がするが、けれど女王に疲れの色は微塵もない。

やり直しの成果なのか、もともとの問題点が軽微だったためか、とにかく急を要するものはすべて片づき、少しの空いた時間で、彼女はロレンツォを講師にレポートを書いていた。

通っていた学校では卒業するためにレポートを提出する必要があったとかで、一応再現しておこうというわけらしい。

だが、当時と同じことをしてもと、ロレンツォによさそうな題材探しの手伝いを頼んだのだ。

彼のほうも面白いねと笑いながら、ベースとオウルで似ている事象を選び、その比較はどうかと提示した。

文化レベルの差はあれど、抱える問題はいつの世も変わらない。

ダンブが存在することからしても、文明が進んでも片づかないことがあるのは明らかだ。

アンジュは関連する資料を集め、なかなかのレポートを提出した……らしい。

自分はその場にいなかったが、ロレンツォが丁寧に教えてくれたのだ。

着眼点が面白くてね、とご機嫌な彼は、しばらく彼女のレポートと、それに連なる研究に没頭するつもりらしい。

もうすぐ女王の年齢ももどるので、彼女本体には関心が薄れたのだろう。

そんなこんなで時間はすぎ、夕暮れ間近、再び守護聖が全員集められた。

「——多分、明日の朝には完全に復帰できると思いますが」

見た目はほぼ以前と同じ容姿になった彼女が言う。今日の執務も、データを見せてもらったら、当時と同じくらいできましたから、とも。

「まだ少し記憶が混乱しているし、戻りきった気がしないので……多分、ですけど」

予測どおりだな、と思ったが、他の守護聖に知らせているかわからないので、沈黙を保つ。

喋りかたはほぼもとどおりだし、女王のサクリアに揺らぎもない。

だからだろう、聞いている守護聖たちからは、安心した空気が感じられる。

「だから、迷惑をかけることもなくなるはずですよ」

「迷惑なんてかかってないぞ。なんだかんだ楽しかったから、気にするな！」

しおれた顔で謝罪しようとするアンジュを止めた清々しいユエの言葉に、苦笑いを返す様子を遠巻きに眺める。

こういう時は、ユエやノアに任せるのが適任だ。なんだかんだで首座と次席は伊達ではない。

二人が交互に声をかけると、女王は安心した顔になった。

完全にもどつたらちよつとしたお祝いでもしようという話で、その場はおさまる。

三々五々、守護聖たちが帰り、シユリも怪しまれないようにいったん聖殿を出た。

サイラスから個人的な連絡はないし、そもそも女王が私邸にもどらないかぎり、彼も自由に動けないだろう。

なんだかんだ、王立研究院に行ったり、過去のデータを洗いだしたり、おそらくあちらの宇宙にも連絡をとつたりと、忙しくしているのだから。

となると、しばらく時間がかかるはずだ。

用もないのに聖殿をうるついでにしているわけにもいかないし、一度自分も邸へもどるほうがいい。

時間を潰して訪ねていけば、おそらくサイラスからなんらかの行動をとるだろう。

十分に成長したアンジュなら、あれこれ世話を焼く必要もなさそうだし。

一応、誰かに見咎められたら酒でも飲みに出たと

口にしよう決めて私服に着替え、邸の者にもあとはいいと言いついて外へ出る。

夜になつても聖地は安全で、以前のような重苦しい空気は感じない。

女王の力が安定したからだけではなく、聖地にいる者たち、なにより己の精神が穏やかだからだろう。

……今は、少々波風が立っているもの。

感傷に浸るなどしたくないが、明日、一体どうなるのか、恋人の記憶を失っていたら、己はどうすればいいのか——考えるとどうにも足が重くなる。

それでも歩いていけばいずれば目的地につくもので、外に出ているらしいサイラスがすつと近づいてきた。

「ずいぶんとゆつくりでしたね？」

「……歩いたからな」

嫌味の響きはなく、純粹な疑問の色をのせた問いかけに、覚えず眉を寄せてしまう。

咎められているわけではないとわかっていても、気まずかった。

「まあ、いいですが、こちらへどうぞ」

堂々と玄関を開けられて驚いたが、アンジュがすでに部屋にいるなら、出入りしてもわかりはしない。

「なんでこんなに部屋があるんですか」

——とかつて彼女がぼやいて、シユリも同意したが、女王や守護聖が住むに相応しい大きさの住まい

となると、部屋数も増えてしまう。

サイラスが案内したのは、今まで足を踏み入れたことのない区画だった。

ほとんど使っていないのだろう、ぴかぴかの鍵によつて開いた扉を抜ければ、中には予想に違わず立派な部屋があった。

間取りは概ねどの部屋も同じらしく、アンジュの部屋と大差ない。

だが調度品はどちらかというとな性的で、しかも、妙に見覚えがある。

「ここは……」

「客室です」

「それは言われなくてもわかる」

呟いたシュリに、サイラスの声がかぶる。

言いたいことはそうじゃない、と口にせず睨んだが、サイラスはにこやかに微笑んだままで。

「私の口からは申し上げられませんが、本人に聞いて下さい。……とりあえず、この部屋は好きにどうぞ」

鍵はマスターキーを除くと、二つしかないのだからささないでくださいね、と注意しながらぞんざいに放り投げてくる。

鍵をキャッチし、言葉の意味を吟味する前に、有能な執事は一礼して出ていってしまった。

だからわざと投げてよこしたのだろう。

となれば、引きとめても説明してくれない。

突っ立っていてもしかたがないので、とりあえずソファに腰を落とす。……固さは己の好みだ。

聖地の、というより、女王試験時のそれに近い調度品なのは、おそらく内装の指示を出した時期のせいに違いない。

棚に置かれているいくつかのロックグラスに、丁寧に保管されている銘柄。

リネン類は使用人がまめに交換し、掃除も勿論欠かしていかないだろう。

いつでも訪れることができるように——けれど実際に使うのが今だなんて、ずいぶん皮肉な話だ。

「……答え合わせをしないと」

柔らかく呟いて、手持ちぶさたに室内を見ていることにする。

酒の棚には、飲みたいが価格がとんでもないので、守護聖になった今も躊躇する、とこぼした酒まで入っていた。

一瞬、開けてしまおうかと思つたが我慢する。

クローゼットの中には、間違いなく恋人が選んだであろう寝間着と、なぜかトレーニングウェアも並んでいた。

ありがたく拝借して、シュリが余裕で二人は眠れそうなベッドに横になる。

——眠って目を覚ませば、おそらくアンジュはも

ともどつっている。

女王として、そして——個としてもどつっているはずだ。今までのとおりになら。

だが、それは予測でしかなくて、さらに言えばシユリの願望でしかない。

恋人をとりもどしたい、と渴望するのは当然の心理だという気持ちと、それは本当に宇宙が望んでいるのか、という疑念。

サイラスはこの状態で即位できたのだから、と発言したが、シユリはそこまで自信が持てない。

レイナが女王でもいいだろうと、一度でも考えたのだからなおさらだ。

考えれば眠れなくなりそうだが、どうあがいても時は止められない。

望むと望まざるとに関わらず、誰にも等しく時間は流れ、過ぎていく。

聖地にいる守護聖も、女王も、例外ではない。

昨夜はほとんど徹夜だったから、寝不足を避けるべきだ。

頭ではわかっていても、緊張した脳はなかなか眠ろうとしない。

やっぱり酒を拝借しようかと悩んでいるうちに、ようやく睡眠に負けることができた。

DAY:END

——そして朝。

時計を確認すれば夜が明けてあまり間がない。

なんだかんだで、惰眠を貪ることはできなかったわけだ。

流石に早起きに過ぎるので、アンジュはまだ眠っているだろう。

だが、今から二度寝をする気にもなれない。

聖地を走るか、と考えたが、ヴァージルに会って気を遣われるのも嫌だ。

結局、無心になれるというところで、着替えもあるしと筋トレに没頭することに決めた。

迂闊な場所で行うと気づかれそうだが、調理場などのある棟の裏なら問題ない。

客室は人通りのほとんどないエリアらしく、早朝ということもあって静まりかえっている。

調理場のほうは流石に動きだしていたが、女王の変化に動揺はあるのだろう、いつもより精彩を欠いている気がした。

とはいえ、シユリが声をかけても気を遣わせるだけだ。

無言で裏手に回り、これでもかとい通りの運動をすませ、汗だくの身体をシャワーで洗い流すと、色々な意味ですつきりした。

さてどうするか、ととりあえず部屋から出てみるが、サイラスは出していない。

もしもアンジュが恋人のことを忘れていた場合、早朝に部屋を訪ねたら一発で不審者だ。

だから部屋の前まで行こうとしたがやめにして、ひとまず外に出ることにした。

邸の中でばったり出くわすよりは、まだ理由づけができるだろう。

歩いてきたと見えるようにいくらか道をもどり、再び私邸へと歩いていく。

朝早くから訪ねた理由は……まあ、心配だったとか、昨夜を引き合いに出せば記憶がなくても誤魔化せるだろう。

邸全体が見えるくらいまで近づいて、そこで停止した。

どうせサイラスだったら、いつのまにか近づいてくる。見張っておく必要は感じないが、習性というものだ。

扉の前でうろろろするのもどうかと思ひ、適当な木陰に身を潜めた。……これも大概だが、目につかないからよしとする。

彼女が出てくるかどうかもわからないが、その時はその時だ。

これならスポーツウェアのほうが、言い訳がついたしよかつただろうか、と考えはじめたころ、扉が

ゆっくりと開いた。

表のドアから出てくる者は、ごくわずかで、ほとんどが通用口を使用する。

だから、それが誰かわかった瞬間、矢も楯もたまたま飛びだした。

直後に減速をかけられたのは、我ながらたいしたものだと褒めてやりたい。

もしも二人の関係を覚えていなかったら、全速力で駆けつけたシユリを怪訝に思うことだろう。

咄嗟に頭が働いたので、どうにか早足まで落とすことができた。

アンジュは見慣れた私服姿で周囲を見渡してから、小走りに進みはじめる。

「おい、急ぐと危ないぞ」
思わず遠くから声をはりあげると、弾かれたように顔を上げた。

蒼い瞳がシユリをとらえ、視線が絡んだと感じた瞬間、アンジュは猛然とダツシユしてきた。

こちらも走っては危険だと判断し、突き進んでくる彼女を待つことにする。

アンジュはそのまま、突撃する勢いでシユリの懐に飛びこんだ。

「シユリ……!!」

頭から腹にいかれたので、正直わりと痛い。

まさか頭突きをかまされるとは想像しておらず、抱きとめはしたものの、シユリにしては情けないことに尻餅をつく羽目になった。

それでも、アンジュに怪我がないよう庇うことは忘れない。

「わ、す、すみません!」
慌てて謝罪し立ちあがろうとする腕をつかみ、いい、と呟く。

「構わないから、顔を見せてくれ」
この際、体勢は二の次だ、今は格好つける時間も惜しい。

懇願するシユリに、アンジュは上げかけていた腰を落とし、そのまま足の間におさまった。

そろりと細い——薄く桃色に色づいた——指先が伸びて頬にふれ、視線がまじわること数秒。

小難しい理由ではなく、強いて言うなら魂が正解だと告げる。

視線が、含まれる想いや、すべてを伝えてきてくれたようだった。

「……ただいま帰りました、シユリ」

己の得た答えを裏づけるようにアンジュが囁き、そのまま、ぎゅつと抱きついてきた。

力強い抱擁だが、流石に今度は後ろに倒れるようなヘマはしない。

すかさず回した両腕が感じるぬくもりも、腰の細

さも、記憶にあるものと同じだ。

「——ああ、お帰り、アンジュ」

声が震えたが、お相子だから構わないだろう。

しばらくすると、ぐず、とくぐもった音が聞こえてきた。

「……なにかから、言えば、いいか、わからない、けど……」

しゃくりあげながら言うものだから、喉が詰まらないか心配になる。

「わすれて、……っ、ご、ごめんなさ」

「謝らなくていい」

謝罪は聞きたくなかった。

たとえ、そのほうがアンジュ自身が納得するとしてもだ。

この様子からして、彼女も望んだことではない、ならば、少なくともシユリにごめんなきいは不要だ。

負の感情を持ったのは事実だが、アンジュを責める気は起さないのだから。

「今、覚えているなら、いいんだ」

噛みしめるように囁くと、か細い声で礼が帰ってきた。

あやすように、なだめるように背を叩いてやるが、なおさら泣き声は大きくなる。

けれど、止めようという気は起きなかった。

「好きなだけ泣いていい。——お前がお前であるな

らな」

シユリの恋人が帰ってきたのだ、ならば、焦る必要はない。

我ながら甘ったるい声で促せば、堰を切ったように泣き声が溢れた。

出会ってからはじめて聞いた、全力の号泣だった。

急な赤ん坊への変化から、成長と記憶の整理、それらを短い期間で行ったのだ、感情が混沌と化するも無理はないだろう。

成長をやり直している最中は、女王の記憶があるにしても、あまりにもおとなしすぎた。

きつと、かなりの我慢をしていたのだろう。今さうだが、もつと気を配るべきだった。

おまけに、恋仲であることを忘れていた事実を覚えていたのなら、なおさら情緒も不安定になるに違いない。

怒っていないし、無事がなによりなのだ、どうか伝わって欲しいと背や頭をなでてやる。

こんな木陰で、地べたにすわりこんで、子供のように泣きじゃくる女王と、相手を崩してあやす炎の守護聖。

誰かが通りかかったら大問題だが、だからと移動を促す気にはなれなかった。

久しぶりの、シユリの知るアンジュの体温だとか、声だとか——それがほとんど涙声だとしても——少

しでも手放したくなくて。

どうせ無駄にデキる執事が人払いをしているに違いない。

だからシユリはアンジュが落ちつくまで、そのままの体勢で続けた。

「……少しは落ちついたみたいだな」

しゃくりあげることもなくなり、おとなしくなったころあいで声をかけた。

おそらく当人は羞恥で動けないだろうと判断したからだ。

耳の端まで赤く染めていることから明らかに、無言のままうなずかれる。

おとなしくしているとその耳もとに囁いて、抱きあげると、ぎゅうつと首にかじりつかれた。

本音を言えば少々痛いし動きづらいが、この状況でぶち壊すことを指摘する気はない。

「このあと守護聖全員と会うだろう、それまでに顔をなんとかしないと」

でないと、多分俺が怒られる——とは続けない。入口へ行けば、にっこり笑顔の執事は最早、予定

調和だ。

「シユリ、細かい話は……あとで、いいですか」
そつと床に降ろしてやると、サイラスからタオル

を受けとり、顔を雑に拭いてから見上げてくる。

泣きはらした目にくしゃくしゃの髪の毛、皺の寄った衣装。

——それでも、宇宙で一番愛おしい。
勿論だ、と笑う己の顔は、おそらく大分腐抜けているのだろう。

サイラスに見られるのは瘡だが、アンジュを安心させられるなら構わないし、そもそも、彼女の前で気を張る必要もない。

人前なので額に口づけるだけにとどめて、シユリも守護聖として支度するべく、私邸にもどることにした。

「——というわけで、元にもどりました。みなさんには改めて、ありがとうございました」
軽く頭を下げる女王に対し、守護聖はみな穏やかな顔だ。

迷惑じゃない、と昨日言われたことを覚えているからこそその感謝の言葉なのだろう。

実際、執務がとどこおるほどではなかったし、小さなアンジュに癒やされたのも事実だ。

「それで、能力や体調はどうなのかな」

興味津々といったロレンツォの言葉に、少しだけ睨みつけたくなる。

質問自体はまっとうなのだが、どうしたって発言者のせいだ。

他の数名も微妙な顔なので、心境はみな一緒なのだろう。

慣れっこの女王は気を悪くもせず、んー、と言葉に悩む様子を見せる。

「数値はあとで王立研究院が出すと思いますけど、そうですね……近く、なった感じですよ」

「近い？」

怪訝そうに思わず声を出したカナタを咎めることもなく、うなずいてみせる。

「宇宙意思との繋がりがというか……前は一枚隔っていた感じがあったけれど、もどかしさがなくなってきたような？」

感覚の話なので、と曖昧な言い回しを申しわけなさそうに釈明したが、守護聖たちにも自身のサクリアがある。

なんとなくではあるが、通じる言葉に、それぞれ納得したらしい。

「女王として問題ないのはわかったが、んで……その……」

首座として聞かねばと責任感を持っているのだから、いざとなると言葉が出ないらしい。

もごもごとシュリとアンジュの間で視線を何往復かさせ、なおも言い淀むユエに、アンジュはにこり

と微笑んだ。

「私個人の記憶も、ちゃんと整理されてもどつてるよ、ベースのことも、女王試験の間のこと……シュリのことも」

敢えて砕けた、女王ではない時間にユエと接する口調にすれば、ばあっとわかりやすいほどに表情が輝く。

「ならよかった！ 安心したぜ！」

一転してにかっと笑う姿に苦笑する者もいたが、全員の感想は同じだろう。

「明日以降は通常通りで大丈夫です。みなさんもそのつもりでお願いします」

女王の威厳をとりもどした彼女の声には、やはり従うしかない力がある。

決して強い命令口調でも、大きな声でもないが、頭を垂れて是と答えるのは、やはり女王と守護聖だからなのだろう。

壇上の彼女は、紛うことなく女王で、炎の守護聖としてそれが嬉しい。

彼女の守護聖としてここにいられることは、間違いないく己の誇りなのだから。

AFTER: i

女王が本来の姿にもどり、これでいつもどおり、と言いたいところだが、本人は検査だなんだと忙しかったらしい。

星の間での仕事も早々に、頭から爪先まで調べられたという。

だが、シユリはいつもどおりに仕事をしただけだった。

……いや、合間に何人もが執務室を訪れて、よかつたな、だの、嬉しくてもはしやぎすぎないようにね、だの、激励なのか殴られたいのかわからないことを言いに来たが。

なんだかんだ心配をかけていたし、記憶があると知ってほっとしているのだろう。

他人のことによくそこまで一喜一憂できるなという気持ちと、何度も感じるくすぐったさが同時に去来する。

逆に数名はまったく顔を見せなかったが、それはそれで彼らしいと思ってしまう。

きっちり仕事を終わらせて邸へもどれば、すでに通達があったのだろう、使用人たちもほっとした様子だった。

口にはせずとも、心配していたのは同じなのだろう。言葉少なに感謝を伝えれば、柔らかく微笑んで

よかつたですね、と頭を下げられた。

こういったやりとりができるようになったのも、ごく最近の話で、けれど、悪くはない。

守護聖たちにも礼は都度告げているが、アンジュと二人でなにか返すべきだろうか。

こういうことには不得手なので、相談してみようかと準備していると、来客が報された。

誰か、なんて問う必要もなく部屋に入ってきたのは、私服に着替えた恋人だった。

「子供の間はこっちにきてもらっていたので、今夜は私から、つて」

状況が状況だったのだから、構わないのだが、妙に律儀な彼女らしい。

べつにどちらの私邸であっても、泊まるに困らないだけの用意はある。

問題ないと当人が断言するなら、こちらからあれこれ言うのも野暮だろう。

こみいった話はあとにして、二人で久々となる夕食の席を楽しんだ。

料理するがわもはりきつたらしく、急な来訪のわりに豪華な品々が並んで、面はゆい気持ちをまた味わうことになった。

「体調は問題ないのか？」

もとにもどったただけではあるが、その前に急な成長をしているのだ。

シュリの疑問に、大丈夫です、と笑ってみせる。「幼い時の身体の記憶があるので、大人になると重たいんだな……とと思ってますけど」

通常の成長速度であれば気づかないことだが、数時間で変化し、記憶もあれば感じそうなことだ。

核心にはふれない雑談をかわしたのち、寝る支度を整えてしまう。

いつもなら休む前に少し飲むところだが、今日はやめておいた。

多少酒を入れても思考に問題はないが、完全な素面でいたいからだ。

見慣れたパジャマ姿のアンジュと共に、ベッドの端に隣あってすわる。

「改めて、今回は迷惑と……心配をかけてしまいましたがね」

「そうだな、……お前を失うかもしれない不安は、もう御免だ」

強がる気にもなれず素直に吐露すれば、白い腕が伸びて頭をなでてくる。

今は理を外れているとはいえ、人間にもどったあとは、いずれ別れがくる。

「しかし、守護聖としては、ちよつと迷惑をかける、

どころではなかったが」

実際の迷惑はさほどではなかったが、はじめの衝撃は「ちよつと」どころではないものだった。

赤子になる前の会話を引きあいに出すと、アンジュはへにやりと眉を下げた。

つまり、彼女にしても予定外だったらしい。それから、数日前に守護聖の前でした説明を、もう少し詳しく教えてくれた。

そもそののきっかけは、アンジュの年齢が高すぎることであったのは言ったとおり。

故郷が女王についてほとんど知られていないこともあり、聖地と——宇宙意思と馴染むのに時間がかかると予想された。

それまでに強い力を行使し続けると、消耗が激しくなる。

だが不安定な宇宙は、まだまだ力が必要で、出し惜しみをするわけにもいかないが、となると女王としての寿命は短くなってしまう。

一山越えたところで慣れさせるための行動を起こそうと宇宙意思と決めたのだという。

「予定では十六歳くらいまでにもどるはずだったんです」

歴代の女王と同じくらい年齢からやり直す程度で問題ないと判断したからだ。

記憶も保持できるようにするつもりで、バックア

ツプのようなものをとる算段だった。

ところが、やったことのない力の使いかただったからか、練習のつもりが本番になり、うっかり赤ん坊まで逆もどり——となつてしまった。

ただ、おかげでよかつたこともあるらしい。

「みんなの前でも言いましたけど、力を使うのが楽になつたというか、自然にできるというか……」

馴染んだ結果なんでしょうね、と言うから、女王としてはいいことなのだろう。

おそらく、中途半端なもどりがたではここまでいかなかつただろう、とも続いた。

個としての記憶が完璧なのは心配だが、忘れているものを拾うことなど誰にもできない。

そもそも子供になる前だつて、覚えていないことはたくさんあつたはずだから。

もしかしたら、今後の会話で齟齬が出てくるかもしれないが、シユリが黙つていればいいだけだ。

彼女を悲しませるだけならば、たとえ欠けていることに気づいても、知らせるつもりはない。

「それで……シユリのことは、恋人としては思ひ出せなかつたんですけど」

とんとんと膝を叩かれたので空けてやると、ころんと頭を乗せて見上げてくる。

「誰より信頼していい、つて、それだけは覚えていたつていうか……身にしみていたというか」

「……なかなかの殺し文句だな」

色々な意味で、と胸中で加える。生殺しにもなりかねないからだ。

「私はシユリを選んで、女王も選んだんです」

蒼い瞳は赤ん坊のころから変わらないが、目の輝きが違う。

少なくともシユリにはそう感じる。女王であり恋人であるアンジュの目はこれだ、と。

「だから、どっちも絶対にあきらめないつて決めていて。……ちゃんと、あきらめないまままで、いられました」

「ああ、かえつてきてくれて、よかつた」

溢れて膝に落ちた涙を、無骨な指で拭つてやる。

断りなくふれられる関係にもどれたことが、とても嬉しかった。

「おかげで、多分、女王としても長くいられるはずです」

不安定な状況で即位した女王の在位期間は、どうしても短くなる。

彼方の宇宙ほど安定すれば、守護聖と同等の時間になるだろうが、現状では倍以上の差だ。

勿論、アンジュが先に女王を降りた時のことは今から考えている。

人間になつた彼女を一人だけで地上へ落とすなんて、絶対にするつもりはない。

「シユリが守護聖でいる間は、私もできるだけ女王でいたいんです」

我儘ですけど、と笑ってみせるが、とんでもない決意だ。

今までの女王の様子を調べているはずなのに、言い切ってみせる。

もともと今回の騒動に苦言を呈するつもりはなかったが、そう告げられては二の句が継げない。

アンジュを強引に起こし抱きしめると、無言のシユリを咎めることもなく、背中を腕を回してくれる。

いつのまにか身体になじんだ感触と、混じりあう体温と——けれど、まだ足りないかと奥底が叫ぶ。

とはいえ彼女は病み上がりのようなものだ。そっと長く息を吐いて気を落ちつかせようとするが、ふと見た恋人の耳どころか顔まで赤い。

「……もともどった、とは、思うんですけれど」

いかがわしい場所に腰を当てているわけでもないし、どうしたのかと訊ねる前に、とつとつと喋りはじめる。

シユリの胸に顔を押しつけているので、表情はよく見えない。

「自分では、よく、わからないところもあるので、……か、確認、して、くれませんか？」

時々、予想もしていない爆弾を落とす恋人だが、こうくるとは思わなかった。

意味するところがわからないほど、お互い初心ではない。

「ユエに、明日は二人とも休みでいいって言われましたし」

……それはつまり、実際に休んだ場合、他の守護聖には理由がバレバレになるということだが、気づいているのだろうか。

ロレンツオあたりにはからかわれるだろうし、年若い者たちは顔を合わせづらくなる気がする。

ありがた迷惑な配慮だが、そこまでの無茶はしないほうがいいだろう。

「——まだ本調子ではないだろうから、なにもしないつもりだった」

ふわりと流れてくる、自分と同じシャンプーの匂い。それと混じる彼女自身の香り。

密着してわかるのは暖かさだけではなく、成人女性らしい肉感もだ。

本人から許しを得たのなら、パジャマの下の素肌を見たい欲求を殺す必要はない。……手加減は必須なもの。

「最後まではしないかもしれないが」

流れでどうなるかわからないものの、無茶を強いるつもりはない。

「感じさせてくれ。確認させてくれ。それよりなにより——朝まで側にいてくれ」

恥ずかしがりながらも視線を合わせてくれたアンジュに懇願すると、潤んだ目でこくりとうなずいた。「私も、そうしたいです」

「——休まなくてはならないほどには、しない」

自戒を込めて呟いて、そっとベッドに沈ませる。

飢えているのは本当だけれど、久々の恋人らしい距離感を満喫したい気持ちがり、落とすキスはやわらかなものになる。

「時に……あの……聞いたことは、なかったんですけど」

だからキスの合間に余裕が生まれ、アンジュは微かに息を弾ませながら、呟きを落とす。

手を止めると、彼女は三つほどボタンを外され開かれていたパジャマを見下ろして、赤面した。

それでも気になっていることなのだろう、果敢に口を開く。

「見えない位置に、ほくろとか、あるのかなって」ドラマとかで、そういうシーンを見たこともあるんです、と言われて、なるほど、と得心する。

気づかない場所であれば、消そうとも思わない。顔かたちを変えても気づかれる——なんていうのは、読んだミステリーにもあった。

「そういうものはないな——残念と言うべきかはわからないが」

「たしかに、残念は、ちよつと違いますかね……？」

病気とかの手術もないです」

元気なのはいいことですが、と無邪気に呟く彼女に答えられず、少しだけ抱きしめる腕に力が入る。

気づかれぬよう誤魔化さなくてならない。——これは、アンジュは知らなくていいことだから。

「数字として覚えているわけじゃないが」わざとらしくない程度の間を置いて、話題をずらすことにする。

するり、と性的なものより、確認するような手つきで首からゆっくり下へ手を落とす。

女性らしい曲線と、己とは違う、筋肉のついていない身体つき。

平均体重だのなんだのが存在することは理解しているが、そういうものではなくて。

「——俺に馴染むから、それでいい」だから問題ないのだと言外に含めると、ちいさく微笑んだ。

データとしてではなく、正確な記憶でもない。不確かであやふやなのに、二人の間でならにより信用のおけるものだ。

「まあ、ちよつとだけ、もうちよつとこう……って思ったりもしましたけど」

半裸の状態だというのに、会話はどこか色気がなくなってきた。

アンジュは己の胸を見下ろして、

「大きさに不満は……そんなにいですけど」
ともごもご呟いた。その口ぶりは、いくらか不満がある裏返しだろう。

平均的な大きさがどれくらいかはわからないが、肉感的と表現されるほどではない。

ただ、それが重要かという点、そんなことはまったくくない。

しかしこの手の問題は、シユリがなにを言ってもいい効果はないので、曖昧にうなずくにとどめておいた。

たしかに、どうせやり直したのなら、と思う気持ちはあるだろう。

体質的にどうこうという部分は、シユリにだって存在する。

そのあたりをふまえたトレーニングメニューを組んで、ベストといえる体型をつくりあげたのが今ではあるのだが。

「——まあ、俺も考えたことはあったが、結局、あまり変わらなかつただろうな」

少しだけ視線を外すと、気づいた彼女はやわらかな視線で続きを促してくる。

急かさなないその態度に感謝しつつ、ゆっくりと言葉を紡いでいった。

「たとえ俺の髪の毛が本当に黒くても、腕があと五センチ長くても——」

敵に見つからずにすんだかは怪しいし、助けられない命もあつただろう。

最後まで口にしなくても、おおよその見当はついに違いない。

言葉はなく、ただ胸の中に抱きこんでくれて、ゆっくり頭をなでられる。

聞こえてくる心臓の音に心が落ちついていくのを自覚して、ああ、これも彼女だからだ、と確信した。

確認だなんだと誘い誘われたけれど、こういう時間も悪くない。

だってこれも、女王であり恋人である彼女としかできないことだから。

夜はまだ長い、益体ない話をして眠ることになつても文句はないし、どこかで火が点いても望むところだ。

どちらにしろ、今はもう、次を望めるのだから。

AFTER:2

「そういえば、アンジュ、気になっていたことがあるんだが」

ベッドでのんびんだらりと過ごしている時間、ふと思いだして口を開いた。

お疲れ気味の恋人も隣でごろごろしていたのだが、すすすと寄って首をかしげてみせる。

「お前が子供の間、客室を宛がわれたんだが、その内装が、」

言葉が途中で止まったのは、アンジュの表情がみるみる変化したからだ。

嫌がっているわけではなくて、羞恥心に耐えかねて、といった具合か。

どうやらあまりふれられたくない話題だったらしいが、今さら撤回はできないし、気になってもいる。

のんびりと待つという意思表示を兼ねて、飲物を用意してこようと言いついて立ちあがった。

刺激物は避けて、暖かいお茶を彼女と選んだ揃いの湯飲みに入れる。

彼女の故郷のお茶というものは、はじめは馴染みのないものだったが、今ではしつくりくるくらい、同じ時間をすごしている。

それでも、まだ知らないことがあるから面白い。ベッドにもどると、アンジュは縁に腰かけていた。

それならと湯飲みを渡してやると、律儀に礼を口にしてから飲んでいく。

隣に腰を落ちつけて、しばらく無言で暖かいお茶を飲んだ。

「……この家の内装を考えた時に、あの部屋も一緒に頼んだんです」

中身がなくなっただけ、ぼつりと言葉が落ちた。となると、かなり前からあったわけだが、シユリは一度も案内されたことがない。

「あつたほうがいいかなあつて思ったんです。でも、そこを使うくらいなら、シユリは私邸にもどればい

いって気づいて。だからつくるだけつくって、それきりです」

たしかに、アンジュの部屋を訪ねる時は、余裕がある時や休日前だから、彼女の部屋ですごしている。

離れた部屋にいる意味なんてないし、二人がめいめに過ごしても余る広さだから、不自由を感じたことはない。

お互いの予定が合わなければ、それぞれの私邸に帰るだけだ。

聖地内の移動はさして時間もかからない。

こちらに移動してすぐ内装に手をかけたから、女王試験時のシユリの執務室しか参考にできず、あの部屋なのだろう。

……まあ、あの執事が絡んでいれば、聖地の内装

も筒抜けだったに違いないが。

「なんだかんだで彼女に甘いあの男は、こちらのシユリの部屋ではなく、わざと試験時を模したに違いない。」

「途中で気づいたなら、あそこまでしつらえる必要はなかったんじゃないか？」

「見たところ完璧に仕上げていたが、工事のさなかに中止してもよかつただろう。」

「無駄遣いとまでは言わないし、実際に使用したわけだが、疑問は残る。」

「しかも、家具を置いただけではなく、小物まで揃えてあった。」

「クローゼットの着替えは、見覚えはあつても新品だった。」

さらに棚にあつた、大量の酒瓶。

すべて未開封だったし保管方法も正しかったが、ちゃんと酒蔵があるのだから、わざわざあの場所に置く必要性がない。

わざわざ準備したことは間違いない。

誰かがすごした形跡はないが、寒々しさもない、不思議な空感だった。

シユリの疑問に、アンジュはうう、としばらく呻いていたが、やがて恥ずかしそうに口を開いた。

「忙しくて会えない時とかに、ちよつと行って、女王試験の時を思いだしたり、そういう……のを、し

ていた、ので」

「なんともかわいらしい理由に、自然と顔がほころんだのがわかつた。」

「きつと、そう使用するとわかつていて、サイラスも手を加えたのだろう。」

「お見通しっぷりが少しばかり面白くない気にもなるが、恋人には言わずにおいて、あとで執事に一言釘を刺すことにする。」

「……それに、ちよつと一緒に暮らしてみたいな気分も出ましたし」

「他にも部屋がたくさんあるから、あくまで「つばい」程度ですけど、と加えられる。」

「たしかにダンブでも、拠点をつくってからは個室を持った。」

「はじめての自分の部屋というものに、らしくないほどはしゃいで嬉しくなつたものだ。」

「時には他の連中の部屋へ転がりこんで、くだらない雑談をして、そのまま寝てしまつたりもした。」

「アンジュとの関係はまだ恋人だが、いずれ家族になるのだ。」

「できれば寝室はひとつにしたいが、共に暮らす時期によつてはおのおのの部屋も必要だろう。」

「気持ちにはわかつたが、今度からそういう時は遠慮なく俺に言ってくれ」

「用意した相手が足を踏み入れたことのない部屋で、

一人やる気を出されても、面白くない。

それくらいなら、少しでも女王と守護聖ではなく、恋人としての時間を捻出してみせる。

——惑星に派遣されている時は無理なので、限界はあるとしても。

シュリの言葉に、アンジュははにかみながらも頷いてくれた。

折角なので残しておいても構わないとは思いますが、できれば二度と使いたくない、と思いつつ、引き寄せて抱きしめる。

「……じゃあ、明日、シュリの邸に行ってもいいですか？」

猫のように頬をすり寄せながらのお願いは、ささやかすぎるものだ。

「最近ずつとこっちにきてもらってばかりですから」もとの姿にもどって、はじめに彼女が訪ねてきて以降は、ずつとアンジュの邸を訪ねていた。

自室のほうがちつくだらうという配慮と、シュリ本人の気分的な問題だ。

数日間、彼女であって違う存在がいた記憶を上書きしたいと思ったのだ。

今は彼女の部屋にいてもくつろげるようになったし、シュリに不満はなかったのだが、気にしていたのだからか。

「構わないが……どうしてだ？」

もし、負担になっていたら改めようと問いかけたが、表情は恥じらうばかりで、理由は別にあるらしい。

「シュリの部屋に行くと、まるごと包まれてるみたいで……それはそれで、好きなんです」

「……そうか」

とんだ殺し文句を、前ふりなく言わないでほしい。部屋なんて気にしないくらい全部包んでやろうかと考えたが、明日も仕事だ、無茶はできない。

その代わり次の休日は覚悟してもらおうと心の中で呟いて、けれど今は紳士に徹するのだった。

十六夜あき / Colors of

Pixiv : 3724939

メール : akiisayohi@gmail.com (あまり見ないのでお急ぎのかたは別手段をお願いします)

ツイッター : [@akiisayohi](https://twitter.com/akiisayohi)

マシュマロ <https://marshmallow-qa.com/akiisayohi?utm>

同人誌はあくまでグレーゾーンです

公式の目にふれないよう配慮をお願いします

転載禁止 印刷したいなら当方の同人誌をお求めください